第六回　鳴海英吉研究会・市川の詩人たち

日時　二〇一二年九月八日（土）午後一時～五時三十分
場所　千葉県市川市生涯学習センター地下集会室
参加人数　二十四名
主催　鳴海英吉研究会実行委員会
（芳賀章内・佐藤文夫・鈴木比佐雄・佐相憲一）

〈プログラム〉
司会　鈴木比佐雄・佐相憲一
開会の言葉　朝倉宏哉
第一部　研究講演（司会　鈴木比佐雄）
講演①「鳴海英吉の詩の魅力」佐藤文夫
講演②「村松武司について―朝鮮を懐かしがってはならない―」尾内達也
第二部　スピーチと鳴海英吉の詩の朗読（司会　佐相憲一）
たけうちようこ、北原亜稀人、山佐木進、高橋馨、山中真知子、岡山晴彦
第三部　芳賀章内詩論集『詩的言語の現在』を語り合う
大河原巌、瓜生幸三郎、鈴木比佐雄
閉会の言葉　佐藤文夫

〈開会の言葉〉

朝倉宏哉

皆さん、こんにちは。この暑い中を、第六回の鳴海英吉及び市川の詩人たちの催しにお越しいただき、ありがとうございます。鳴海研究会は二年に一回行っておりますけれども、この前は二年前の九月四日、この日も暑かったと記憶しています。鳴海さんがお亡くなりになったのは二〇〇〇年の八月三十一日、まさに暑い最中でございました。今年で十二年になりまして、ちょうど十三回忌に当たるんですね。ですから、今年の鳴海英吉研究会は特に意義ある気がいたします。お亡くなりになってから二年ごとに研究会をやっていただける詩人というのはめったにいないと思うんですよ。これもですね、コールサックの鈴木比佐雄さんが生前から鳴海英吉さんと長いおつきあいをいたしまして、その作品と人柄にぞっこんほれこんだということで、鳴海さんの文学をもっともっと広めたい、もっともっと深めたいということでですね、ずっと続けているわけであります。ちょうど鳴海さんがお亡くなりになって二年経った二〇〇二年の八月三十一日に『鳴海英吉全詩集』が出されました。鳴海さんご自身が出していた詩集はたくさんありましたが、これらは体裁はあまりよくないものですが、ご自分で肉体労働しながらコツコツと出されてきたものでした。そういう中からこういう立派な全詩集ができたのであります。私はこの全詩集の解説文から帯文にも抜粋された文をあらためて読みまして、この会の意義が身にしみたのでございます。〈鳴海英吉は死ぬまで、事実を直視し、生き生きとした命そのものを掬い上げた、詩を作る「現場の職人」だった。中国大陸、シベリヤ大地、そして北総台地に「坐り場所」をもち、「戦争責任」を内部に問い続ける「反復の職人」だった。私も鳴海英吉の提起した様々な問いに呼応し反復していきたい。〉と、鈴木比佐雄さんは述べています。まさに、十二年経ったいまもですね、さらに反復して、去年の東日本大震災以降の日本の現状も、鳴海英吉の詩を読みこむことによって、またあらたな視点が出てくるのではないかと思ったりもしています。

今日はお手元のプログラムにありますように三部に分かれています。それでは、第一部に入ります。

〈第一部　研究講演〉

鈴木比佐雄（司会）

本日は残暑と言いますか、猛暑の中を皆さん駆けつけてくださいまして、ありがとうございます。鳴海さんが亡くなってもうまる十二年経つんですが、十二年経っても鳴海さんと対話している気分になります。それほど鳴海さんは魅力的な人で、鳴海さんが亡くなった時は、これでもう生きている喜びがなくなったなと、そういう思いになったんですけれども、そういうふうに感じさせる不思議な魅力のある人物でした。シベリアという酷寒の地で、部隊は半分くらいは亡くなったと聞きましたが、その中で生き残って、それからいつも、自分の詩だけじゃなくて、詩人全体のことを考えて、いまどういう詩人が一番頑張っているかとか、どういう詩論を書いている詩人がいるかとかを見ていて、スケールの大きい詩人だといつも思っていました。時代が厳しい時も、鳴海さんだったらどう考えるのかなと考えて、自分自身の詩作にも鳴海さんのエネルギーをもらおうとしているんじゃないかなと感じます。

鳴海さんがシベリアから戻って、実家の横浜が大空襲で焼け野原になっていましたから、両親家族が市川のこの近くに住んでいたということもあって、ここは非常にゆかりのある場所ですので、この場所でやることで鳴海さんの供養にもなるなあと思って研究会を継続しています。

本日は、佐藤文夫さんと尾内達也さんに研究講演をしていただこうと思っております。この鳴海英吉全詩集をつくろうという時に、四つの雑誌が中心になったんですが、「コールサック」と、佐藤文夫さんの「炎樹」と、芳賀章内さんの「鮫」と、「光芒」という千葉を中心とした雑誌の大掛史子さん、その四人が中心になってこれを編集発行したんですけれども、年譜を見ると分かるように、鳴海さんはシベリアから帰ってきて、一九五〇年代はいっしょうけんめい詩を書いていたんですが、共産党を除名されたり、六十年安保の敗北などもあって、しばらく詩を書かなかったんですね。それから十数年、江戸時代に弾圧された不受不施派の研究をしていました。その一九七一、二年の時に、佐藤文夫さんと出会うんですね。佐藤文夫さんと出会って、鳴海英吉さんはもう一度詩を書くんです。ですから、佐藤さんは鳴海さんを詩の世界に引き戻した非常に重要な人物なんです。今日は、その佐藤文夫さんが、鳴海さんや鳴海さんのお父さんのことなど、我々の知らないことも話してくださいます。

尾内達也さんは、私は柏で、尾内さんは松戸で、鳴海さんが亡くなる前から、私の友人のカメラマンの個展で会ったりして交流があったんですが、鳴海英吉研究会の始めから来ていらっしゃって、鳴海さんの本と出合って作品に非常に関心をもってくださって、同時に「列島」の重要人物であった村松武司に関心をもって、村松さんと鳴海さんの二人の詩人を両方見据えながら、今日は戦後の二人の詩人の足跡を講演してくださるということで、非常に興味深いものです。

では、佐藤さんから、よろしくお願いいたします。

研究講演①
「鳴海英吉の詩の魅力」　講師・佐藤文夫

佐藤文夫です。鳴海英吉研究会は今日で第六回ですけれども、はじめは「『鳴海英吉全詩集』を祝う会」というのがあったんですね。それが二〇〇三年の四月で、記念講演が宗左近さん、朗読は末原正彦さんと武力也さんでした。宗さんも武力也さんも、その後亡くなられております。第三部のシンポジウムは、鈴木比佐雄さん、浜田知章さん、本多寿さん、遠山信男さん、石村柳三さん、岸本マチ子さんでした。ここでは浜田さんが亡くなられております。

鳴海さんが最初に出された詩集は『風呂場で浪曲を・・・』という、これは私家版なんですね。この時に出版記念会をやったんですが、その時のハガキがちょうど出てきましたので、これを見ますと、〈人生五十三歳にして初めて処女を失い詩集を出した、千葉県は酒々井の住民・鳴海英吉とその詩集を肴に有志あい集い春まだ浅き神楽坂にて、

一夜じっくりと酒を汲み交したいと思い立ちました。皆さまお誘い合わせの上、どうぞお集い下さい。三月二十六日〉と、これは詩集が出た翌年一九七六年の三月で、会費は三五〇〇円で、神楽坂の日本出版クラブでした。発起人は、石井藤雄、上林猷夫、斉藤正敏、佐藤文夫、城侑、諏訪優、土井大助、遠山信男、中上哲夫、中村温、宮尾修、村岡空、村島正浩、上山ひろし、という十四人なんです。このうち、すでに七人の方が亡くなられました。城侑さんもこの六月に亡くなられました。ですから、私もややそちらに近くなっていますが、鳴海さんも亡くなられた後、あちらの世界の方が楽しいような気が私はするんですね。私も早くそちらへ行きたいような気が最近しているんです。それから、その後に出た『ナホトカ集結地にて』は、最初ワニ・プロダクションから出たんですね、これは仲山清さんという印刷所をやっていて、詩を書いたりもしていた人で、詩とジャズの会で私と知り合いまして、その清ちゃんがつくったものですね。この詩集が壺井繁治賞を受賞しました。その二年後の一九八〇年にですね、『ナホトカ集結地にて』に入っていなかった何篇かを補充して、『定本　ナホトカ集結地にて』が青磁社から出ました。この本の扉にですね、鳴海さんが私に字を書いてくれまして、何と書いてあるかというと、「この詩集はお墓のようなかっこうをしています。佐藤文夫様」とあります。なるほど、これはこうするとお墓の形なんですね。そういう字を書いてくれました。

私は第三回目の時に、鳴海英吉さんについてお話してくださいということで、「鳴海節について―詩と肉声、鳴海さんの詩と方法」というお話をしたんです。今日はそのこともちょっと触れますけれども、まず作品の特性と魅力、二番目に鳴海さんの詩と肉声ということで、それから三番目に先ほどの壺井賞のことをちょっとお話します。

それから最近、シベリア抑留ということで、石原吉郎さんの詩が大変クローズアップされてきています。再評価ということでしょうか。しかし、鳴海英吉さんのシベリア抑留の詩とどう違うのか。これには最近、私はちょっと言いたいことがありますので、そのことをちょっと述べたいと思います。

＊

鳴海さんが亡くなった時に、いろいろな関係した同人誌以外にも、いろいろな人が鳴海さんについて弔辞や弔詩を書いてくださったんですね。追悼文が四十八篇ありました。追悼詩が十四篇でした。それを分類しましてまとめました。皆さんの意見をまとめてみますと、大体五つになるんですね。

一つは、独特のリズムと語り口があるということです。作者に固有の肉声が感じられると。

二つ目、リアリズム。すなわち、詩的で溌溂とした想像力。状況の的確な把握と言葉を練り上げた微細な描写。何よりも鋭敏な批評精神。

三つ目が、複雑で猥雑な内容を単純明快に表現する、臨場感をもった言葉さばき。

四つ目、温かい人間性にあふれた詩精神。机上のリアリズムではなく、あくまで現場に立脚した庶民的なリアリズム。

五番目は、いま申し上げた一から四までを一体化してまとめている点で、出来上がった作品をぜひ声に出して読んでもらいたいということです。

という五つにだいたい分類されます。おそらく皆さんもそういう感じを持たれたんじゃないかと思います。

それで、鳴海さんの作品をこの全詩集の中から傾向として大きく分けると次のように分類できると、解説ノートで鈴木比佐雄さんが整理されています。

一つは、横浜大空襲で焼き殺された「ふさ子」の死を悼む詩。
二つ目は、労働現場の現実をリアルにユーモアも交えて書いた詩。
三つ目は、「へんろ」など民衆史を掘り起こした詩。
四つ目は、シベリア抑留体験の詩。
五つ目は、中国戦線の詩。
六つ目は、戦前の抒情詩など。

という六つの傾向に分類されています。その六つの傾向の作品には、

それぞれ先ほど私が分類しました五つの特徴があるのではないかと思います。それが鳴海英吉さんという詩人の素晴らしい個性だなと感じます。

＊

鳴海さんの生い立ちについてちょっとお話しておきます。鳴海さんのお父さんは活動写真の弁士だったんですね。活弁士というのは、映写しているそばで説明したりセリフを語るんですね。鳴海さんは駒込の動坂付近で生まれたということです。いわゆる「谷根千」と呼ばれる辺りですね。谷中、根津、千駄木、その辺がだいたい鳴海さんのふるさとです。お父さんは、上野日活とか深川豊成館といった活動写真館ですね、そこで活弁士をされていたわけです。非常に人気がありまして、当時、活弁の人気投票というのがあって、東京全体で第三位に入っているんです。徳川夢声が第八位だったと。鳴海さんのお父さんは先輩だったんですね。なぜそれだけ人気があったかっていうと、鳴海さんのお父さんは加川榮一といいまして、この人は川上音二郎の一座に所属していたんですね。明治に川上貞奴なんかといっしょに組んだ人ですけれども、そこで芝居をやってたんですね。ですから、声色が非常に上手だったんです。声を使い分ける。男の声、女の声、こども声、若者の声、年寄りの声、と。それが非常に巧みだったと。それを活かしてやったので、非常に人気があったということです。ここに深川の加川榮一さんの資料がいろいろ出てきまして、大正十二年の松竹キネマ株式会社の給料、俸給ですね、当時それが百六十円と、高い給料をもらっていたようです。そういうわけで、活動写真館に、鳴海英吉さんはこどもの頃からよく通っていたのです。そこで、お父さんがしゃべっているのを聞いているんですね。やっぱりそれが自然に体に入ってくる。

そして、もう一つは、シベリア抑留から帰ってきた一九四七年からですね、いろいろ仕事を探したりしているんですけれども、ともかく芝居が好きだったということで、まず東京自立劇団協議会、東自協、そこの書記になったんですね。芝居をやるんじゃなくて、オルグ担当になって、あちこち地方へ行って宣伝組織する、そのかたわら、中央演劇学校というところに通ったんです。ここの校長さんが土方与志、先生が三島雅夫、滝沢修、千田是也、といったそうそうたる人がいたんですね。そういうところで勉強しましたから、鳴海さんの発声は人並みはずれていると思いますね。そういう素質があったんです。

二十八歳の時に市川で福田律郎さんと出会います。その頃、共産党の活動もしていました。また、中村温さんや井出則雄さんや村松武司さんといっしょに詩をやっていました。ちょうどこの辺りにニッケ（日本毛織株式会社）の大きな工場があったんですね。高い塀があって、門のところに労働者が来ると、福田律郎たちといっしょにビラを配って、いろいろ活動していました。そういう場所なんですね、ここは。福田律郎さんのうちは中山の法華経寺の近くにありましたから、そこにほとんどいりびたって、そこに寝泊まりして暮らしていました。だから、福田律郎の大きな影響を受けていると思います。その後、「列島」の人たちの影響を受けて、「列島」後期にはメンバーにもなっています。

＊

それから、壺井繁治賞の受賞のことですが、今年は第四十回で秋村宏さんが『生きものたち』という詩集で受賞したんですけれども、鳴海さんは第六回の壺井繁治賞ですね。一九七五年に壺井さんが亡くなってから壺井繁治賞という名になったんですけれども、私自身は第二回の賞を『ブルース・マーチ』という詩集でいただいております。その後の第三回は六月に亡くなりました城侑さんの『豚と胃と腸の料理』でした。鳴海英吉さんの『ナホトカ集結地にて』は第六回でした。当時の賞金は十万円だったんですが、神楽坂で授賞式をやって、黒田三郎さんが選考委員長でしたが、黒田さんから賞状と賞金をいただいた時に、中に十万円入っていないと言って鳴海さんが文句を言ったんですね（笑）。そしたら、黒田さんが、残りの八万円は奥さんに渡してあると言ったそうです（笑）。鳴海さん本人に全部渡したら、すぐ使っちゃうだろうと（笑）。その時の壺井賞の選考委員は七人でしたけれ

ども、黒田さんのほかに、安西均さんなんかも入っていました。黒田さんは「この詩集を読むと衝撃力が強い」と言われています。草鹿外吉さんというもう亡くなった詩人でロシア文学者の方は「この詩集を読んでチェーホフとゴーゴリを思い出した」と。確かに、鳴海さんはチェーホフなどに心酔していて、ゴーゴリなども相当読んでいたようですから、それが作品に反映されていたんじゃないかと思います。同時に、H氏賞というのが現代詩人会にありますが、その選考委員だった伊藤桂一さんは『ナホトカ集結地にて』について、「H氏賞ということを離れても、この詩集がもつ現代における意義はもっと多くの人たちに知られてよいのではないか」と言っています。それから、小海永二さんは「リアリズムの骨太い手法は現代詩の病気にいささかもおかされていない」と。当時から現代詩の病気っていうのは、難解であるという病気があって、それはいまも続いているようですけれども、そういうものにおかされていないと言っています。

私も当時、鳴海さんの詩集の書評を一九七六年四月号の「詩人会議」に書いたんですけれども、やはり、「死と生」ですね、それから庶民の楽天性、プロレタリアのふてぶてしさとか、持ち前の正義感、江戸っ子のしゃべり、そういったことから非常に新しい現代詩の資質があるんじゃないかと書いています。

*

六十年代に、「詩とジャズの会」というのを私たちはやっていて、私も当時、詩が非常に難解であるということに反発をもっていました。耳から聞いてわからないという現代詩が一世を風靡していて、みんな何かしかつめらしい顔をして読んでいるというのはおかしいんじゃないかと、そういうことで鳴海さんとも意気投合していたんですね。声に出して詩を読まなきゃいけない、と。諏訪優さんが大変いいことを言ったんですけれども、それは「空間に詩を書くことだ」と。そうすると、一つの詩集は一冊ずつそれぞれ読まれるんですけれども、朗読によって空間で読めば、五十人の人がいれば五十人が読んでくれる、百人の人がいれば百人が読んでくれたということになり、空間に詩を書くということなんですね。白石かずこさんも、寝ている文字をたちあがらせて、馬のようにいななかせたい、と言っているし、中上哲夫さんも、詩のもっている汗臭さ、体臭ですね、それを感じてもらいたい、と。それをどういうふうにしたらいいかということで、朗読会を始めたんですね。当時、我々はジャズが好きだったんですね。モダン・ジャズですね。非常に解放された気分になって。私が好きだったのは黒人のジャズですね。白人のジャズはダンス・ミュージックでどうもダメでした。黒人のアート・ブレーキーとかソニー・ロリンズ、そういうジャズの方がぐっとくる。黒人ジャズの根っこにあるのはブルースですね。ブルースってのがやはり肉声なんですね。で、肉声を発するジャズといっしょにやろうじゃないかということで、最初はレコードを聞きながらとかやっていたんですけれども、物足りないということで、実際の生のジャズでやろうと、当時、白石さんの弟さんが慶応大学の学生のジャズバンドで、「ファイブ・ブラザーズ」というのを五人でやっていて、彼らといっしょにしばらくやっていたんですね。白石恵一さんという方で、その後、TBSに入社して、ついこの間まで北陸放送の社長、会長をやられた、そういう大変活躍された方です。その後、詩とジャズの会は、ニュージャズという音符に頼らないアドリブのジャズでやることになりました。こちらが言葉をぶつけた時に、ミュージシャンが音をぶつけてきて、やり合うわけです。ところで、私が鳴海英吉さんの詩の朗読を初めて聞いたのは千葉県現代詩人会の八千代台の朗読会で、ピアノかバイオリンの伴奏でやったんですね。それはあくまでも伴奏であって、詩とぶつかり合うものじゃなくて、バック・ミュージックみたいな感じですね。その時、鳴海さんが「結婚申込み」っていうのをやったんです。チェーホフにもそういう作品がありますけれども、この鳴海さんのは大変面白い作品で、べらんめえ調で当時の工場の若者をうたった詩ですけれども、面白くてよかったんですね。ところが、そのバック・ミュージックが合わないんです。「鳴海さん、やっぱりジャズの方がいいよ」ってことで、それからそういう会に連れていったんです。そしたらやみつきになったみた

いです。

ここに鳴海さんが書いたものがあります。「七十二年に『詩とニュージャズの会』に連れて行ってくれたのは佐藤文夫でした。千葉の山奥でのんびりと暮していた俺が、鼻先で詩と生のジャズを叩きつけられてびっくり仰天。横で佐藤文夫が解説してくれました。気絶しなかったのは幸いでした。それが詩の朗読会との出会いでした。その頃、俺、自分の詩を変えたいと思っていました。書き始めて誰にでもある一種の戸惑いのようなものを感じていました。作者の内側にこもりがちな詩を外に叩きだすという朗読の中で、一瞬の中で詩は何が訴えられるか、何があるか、それから朗読会を追いかけはじめました。その体験では、吉増剛造さんは百姓かな。百姓のうめきだな。吉原幸子さんは明治の美人画の石版刷りだな。けれど、すごい目をしていて、目が詩を朗読している。白石かずこさんはまたアメリカをまた受胎しに行くんだな。」こんな経験は活字ではどうしても理解しがたいでしょうけれど、朗読に立った詩人から活字以上の詩人の中身が見えてきます、味が出てきます。詩は聴くものじゃないかと思うのです。吉祥寺で私も忘れられない会が一つありました。それは吉祥寺のライブハウスでしたけど、ジョー水木というジャズ・ドラマーがいました。超満員だったんですね。で、朗読を始めたんですけど、ジャズメンたちは張り切っているんですよね。こんなに集まったっていうんで張り切っているんですよ。そこで、詩人たちが朗読した時、詩を持って、雑誌を持って、ぽつぽつ読むわけでしょ。そしたら、ジョーさんがね、「詩人の皆さん、学芸会じゃないぞ」って言うんですよね。もっと真剣にやろうよと。それからみんなシュンとしたんですね。その後、吉増剛造が変わったのもそういうことがあったんですね。彼の朗読はそれから変わりました。いわゆる吉増節ってやつですね。吉原幸子さんなんかもそうです。言葉と音楽がぶつかり合う、そこから何か新しいものが生まれるんじゃないかという、そんな可能性の場所になりましたね。そこに鳴海英吉さんもいて、後に「赤提灯」というグループを自分たちでつくって、始めたわけですね。

＊

シベリアの抑留についてもちょっとお話します。シベリアの抑留をうたった詩人というのは、石原吉郎さんの『サンチョパンサの帰郷』というのと、鳴海英吉さんの『ナホトカ集結地にて』、それから、長尾辰夫さんという人の『シベリア詩集』というのがあります。安西均さんも鳴海さんの詩集を読んだ時に、この長尾さんの『シベリア詩集』を思い出して、急いで探したそうなんですね。秋村宏さんも七十八年の詩人会議で『ナホトカ集結地にて』について書いている時に、ラーゲリを主題にした長尾辰夫の詩や石原吉郎の詩と鳴海英吉の詩の違いということを書いているんです。最近、石原吉郎さんの詩が再評価といいますか、クローズアップされています。これは先月の『東京新聞』の月評で、蜂飼耳さんがこういうことを言っているんですね。「石原吉郎の言葉がもたらす静かな感動は、常に日本語によってこのようなことが思考され、書かれたことがあるのかという驚きと共にある」と。そして、「シベリア抑留の極限状況から生きて日本に戻り、再び詩を書き始めた著者が、文章を書くまでに十五、六年の歳月を要した」と。ところが、鳴海英吉さんは十五、六年じゃなくて三十年かかっているんです。三十年の間にやはり苦闘してね、三十年目にやっとこれが出て来たんですね。ですから、鳴海さんは自分の内部にそういうものをしずませて、そこから立ちあがらせてきたのです。それから、同じ蜂飼耳さんは岩波の『図書』という雑誌にですね、「詩の定義」という石原吉郎の文章の中に、「詩とは何か」について、「ただ、私には私なりの答えがある。詩は書くまいとする衝動なのだ。この言い方は唐突であるかもしれない。だが、この衝動が私をかけって詩に赴かせたことは事実である。詩における言葉はいわば沈黙を語るための言葉、沈黙するための言葉であると言っていい」とあるのを、蜂飼さんは「書くまいとする衝動、次々に書くという動きの対極にあるこうした抑制の力は、何かをぐっと耐えたまま、発語へと反転していく、言葉になる手前で、誰にも聞こえない音できしむ。そこに、詩や人間の源はあるのだろう。石原吉郎の言葉にはためらいの痕跡がある」というふうに

言っているんですね。ある意味、賛成できるところもあるんですけれども、この対極にあるのが、小熊秀雄なんかの「しゃべり捲くれ」ですよね。三・一一以後の状況を見ますと、これを言葉に発して、しゃべりまくるという、そういう時期だと思うんですよね。それがどういう言葉かっていうのは別問題ですよ。しかし、沈黙してという状況ではまずないということだけは確かだと思います。

最近、辺見庸さんなんかも石原吉郎を大変、評価しています。評価していると同時に、ただ「石原吉郎への私の思いはいつも複雑で、話そうにもどうも、訥弁になってしまいます」と。どういうことかというと、『望郷と海』の中で石原吉郎は、ジェノサイド、沢山の人が殺される時にですね、ひとりひとりの死がそこにあるはずだ、と、それをみずに、集団ということに置き換えてはいけないのではないかと言っているんですね。これは確かにそうだと思います。ただ、その後に、絶望があって、また沈黙することを言っているわけです。その石原吉郎への疑問というのを辺見庸は、「今私は石原の叫びに、そうだそうだと同調することも、いや違うぞと反発することもあります。私は石原の声に強く惹かれつつ、その声にあらがってもいます。それは、シベリア抑留経験の苛烈と帰国後の絶望が、詩人のロジックをなにがしか短絡させ、しかも短絡していると安易に言わせない当事者の重みを感じさせてやまないからです。」「一人の魂の行方を見届けようと願う主体、単独者は、ただ単独者として何事か繰り言をつぶやきながら、窒息しているだけでよいのか。単独者はただ単独者として、ただ無害な詩などをつぶやきつつ隠棲していればそれでよいのか。単独者はつまるところ、思い出のみに生き、自他とたたかわず、この期に及んで無傷でいればよいのか。こうした疑問がもともとあります。」ということで、一つの考える素材として石原吉郎を提起しているんですけれども、石原吉郎の有名な次の一行には唸り声を発しそうになります。「私は告発しない。ただ自分の位置に立つ。」

石原吉郎については、鈴木比佐雄さんが「コールサック」や「詩と思想」で詳しく書いています。鈴木さんは石原吉郎は好きな詩人だったんですね。私は石原吉郎は食わず嫌いで、鳴海さんが書いているんですけれども、石原吉郎は鳴海さんと同じシベリア帰りだけれども、彼は上級の将校で特務機関にいたんですね。特務機関というのは憲兵隊です。憲兵隊ってことはどういう仕事かというと、兵隊の詩想調査とか、軍隊のみならず、一般市民までもそういう調査の対象にして、弾圧したり干渉したりする。ひそかにそれを探る、そういう役割です。で、それを聞いた時に私は、憲兵っていう言葉は一番嫌いなんですね。それで石原吉郎はもう読むまいってね、食わず嫌いでしたね。鳴海さんは一兵卒でしたけれども、思想犯だったんですね。思想犯として北支へ送られて、そこで坊主刈りじゃなくて長髪で、いわゆる弁髪で、詰め襟のロングドレスのようなものを着せられて、中国北部の農村工作をやらされたんです。そういう二人の違いが際立っているんですね。

こういう点を鈴木比佐雄さんは大変よく論破されています。これは「詩と思想」の二〇〇三年の四月号に「捨離を反復する詩的精神―鳴海英吉全詩集刊行に寄せて―」というのに書かれています。一言だけ紹介しますと、「私はかつて石原吉郎の熱心な読者だったので、彼の詩や評論の魅力を知っていて、その悲劇的な詩を悼んできたが、詩人として、一人の人間の生き方としては高く評価できない。日常をもっと豊かにし、逆境でも生き抜いていく知恵を暗示し、人間を励ましていくのが文学の大きな役割だと信じたいと考えている。その意味で石原の詩は、戦後詩の代表作であるかのような過度の評価は再検討されるべきだ。それに対して、鳴海英吉の詩群は、再び生き直すことを促す詩群だといえる。編集に携わった私は、鳴海英吉の詩作活動を豊かに反復することができた。」と鈴木さんは述べています。

それから、鈴木さんが「詩学」の二〇〇四年十月号に「列島、シベリア、不受布施派の抵抗精神―鳴海英吉の不屈の詩的精神について―」というのを書かれています。この中で、「香月泰男のシベリアの絵

に匹敵するのは石原吉郎の詩ではなく、鳴海英吉の『ナホトカ集結地にて』だと指摘する。そして、ただ働きの捕虜兵士を使ったシベリア開発の悲劇は、二十世紀最大の不条理として、芸術にまで引き上げられたこの詩集によって、永遠に告発され続けるだろう。」と。これを詩人の三浦健治さん、「炎樹」のメンバーですけれども、彼が「しんぶん赤旗」の詩壇評で紹介しました。

で、このシベリアの抑留者ですけれども、いまだに裁判が続いているんですね。彼らはもう九十歳を越していると思います。どういう裁判かと言いますと、南方、インドネシアとかフィリピン、そこから帰ってきた捕虜、抑留収容所から帰ってきた人たちは、ちゃんと国家から補償を受けているんです。その時の労働に値した賃金を計算してもらって、ちゃんと補償を受けている。ところが、シベリアから帰ってきた人たちは受けていない。なぜかというと、これはロシアが当時はソ連にスターリンがいて、これは労働させたんじゃないとか言って認めていないんですね。国家間の交渉も全くやっていませんから、国から見放されたかたちになって、もらった人でも当時一時金として十万円と銀の杯をもらっただけなんですね。零下三十度、五十度で、苛酷な労働をやって、飢餓状態で、鞭打たれたりして、それだけの重労働の対価を全く受けないでね、ずっと戦後を生きて、その裁判をやっているんです。新聞で見ましたけれども、毎年五月の二十三日というのは、シベリアの抑留者たちが日本に帰って来た日で、その日は鎮魂の日で、千鳥ヶ淵で祈祷する会を毎年やっています。

それから、石村柳三さんもですね、コールサック社から出た詩論集『時の耳と愛語の詩想』の中で、鳴海英吉さんの詩について大変いい書評を書かれています。「なかでも人間の本性としての『食う』ことの恐ろしさ、生きるための業の悲しさを告知した詩篇ともなっている。たとえば『河』に見られる赤ん坊の死骸。『飢』に見る死者の供養物まで盗む姿。『夏』では死んだ兵士の蛆を食う。ある詩では〈死んだまま立っている〉の凍死の現実。『棺』の〈丸太ン棒〉の凍死の体。『農』の小便やうんこを食う場面。『森』の狂うて裸になり、森へ走り帰ってこない姿。まだまだある残酷な真実詩。その中でも、『食う』ことの必要さをもっとも大事とする。石原吉郎も『望郷と海』の中で『現実に目の前に置かれる日ごとのパンの重みは、結局一切の教訓をのりこえる』と断言する。それほど『食う』ことへの執着は強い。」と述べています。

石原吉郎さんというのはクリスチャンなんですね。プロテスタント系のクリスチャンです。二十三歳の頃、応召していますが、その時すでにクリスチャンでした。かたや、鳴海さんは日蓮宗の不受布施派の研究をしたきた。仏教ですね。そういう意味でも、非常に対照的ですね。

まだまだ話したいことはたくさんあるんですけれども、最後に、先ほどの辺見庸さんの『瓦礫の中から言葉を』という本の中に、堀田善衛さんの『方丈記私記』という、『方丈記』自体は一二一二年に書かれた鴨長明の随筆ですが、そこに当時目撃した地震とか大火を書いているんですが、それを堀田善衛は一九四五年の三月十日の大空襲に本所深川で遭っていることで『方丈記私記』ということで書いているんですね。ちょっと紹介しますと、「『方丈記私記』によれば、米軍の大空襲で巨大な火炎地帯となった本所深川の辺りをのぞみながら、堀田は親しい女性がどうなったかを思い、『あるいは煙にむせび、倒れ伏し、あるいは炎にまみれてたちまち死ぬ』という方丈記の記述をそこに重ねています。大火炎の中に女の顔を思い浮かべてみて、私は人間存在というものの根源的な無責任さを自分自身に痛切に感じ、それはもう身動きならぬほど、人間はほかの人間、それがいかに愛している存在であろうとも、ほかの人間の不幸について、何の責任もとれぬ存在であるということを痛感した。それが火に焼かれ、黒こげとなり、半ば炭化して死ぬのは、他者であって、自分ではないという事実はどうしても動かせない。」と。人が死んでいく時にですね、自分がそれを見ていても何ら責任をとれない。たとえば、三・一一の時に、この人〈辺見庸〉は石巻の出身ですから、石巻でたくさん亡くなっているんです。それをテレビで見たりしながら、何にもできない。非常に無責任じゃ

ないかと。だけど、その無責任というのは当然ではないかと、何ら責任がとれないというのが人間の根源的なもので仕方のないことだというんですね。それで、鳴海英吉さんの恋人のふさ子さん、横浜大空襲で焼け死んだふさ子さんを書いた「五月に死んだふさ子のために」という詩があります。「死んだ女と　口づけ　は許されないと／ふさ子はとけた顔をのけぞらせて／烈しく抵抗する／べろっと垂れた唇に口づけを／裂けた乳房を　そっと噛んであげる／さあ　ふさ子　戦争で引き裂かれた肌／ケロイドになった　白い裸を見せておくれ／俺は見詰めてそらしたりはしない」と。これは長い詩なんですけれども、あとほかにも「焼き殺されたふさ子」などの詩がありますが、これはそういう人間の無責任さという一面はありますけれども、鳴海さんがシベリアにいたわけですから何もできない。だけれども、それをこちらへ帰ってきて、さらに直視する、目を逸らさない、そういう責任がこの詩にあらわれてきている。無責任ではないと思います。鳴海さんがそういうことを書きのこしてつぐなっていくという、そういう芯の強さがあったからじゃないかと思うんです。だから、今はここで沈黙しているべきではないと、鳴海さんもおそらくそう言うだろうと思います。どうもありがとうございました。

（拍手）

鈴木比佐雄（司会）

ありがとうございました。佐藤さんは鳴海英吉さんのさまざまなことを論じられる方なので、いつか佐藤さんの鳴海英吉論をまとめられてほしいなと思いました。今後もよろしくお願いします。

では、続きまして、尾内達也さん、よろしくお願いします。

研究講演②　「村松武司について
―朝鮮を懐かしがってはならない―」

講師・尾内達也

尾内達也と申します。よろしくお願いします。

はじめに

今では忘れられた『列島』の詩人、植民地朝鮮に生まれ、戦後詩の誕生に深く関与した村松武司（一九二四－一九九三）が、詩の雑誌やマスコミで話題になることはほとんどありません。わたしにしてからが、二度も忘却してしまった詩人でした。はじめに、村松武司とわたしの、縁について少しお話してから、本題に入りたいと思います。わたしが詩を書き始めたのは、二十五歳のときでした。当時、関西に住んでいて、『現代詩神戸』という同人誌の連合体のような雑誌に、詩を発表していました。二十七歳で、関東に戻ったとき、『現代詩神戸』を主宰していた和田英子さんに、関東でも詩を発表したいのだけれど、だれか、適当な詩人を紹介してほしいと、お願いしたところ、村松さんを紹介されたのでした。村松さんは、当時、市川に住んでいて、詩誌『コスモス』を出しておられました。ぼくも市川にいたので、近いところの詩人ということだったのか、思想傾向に近いものを見出していたのか、今となっては、わかりませんが、とくかく、その紹介を頼りに、ぼくの方から、村松さんへ、手紙を書いたのでした。それに応えて、村松さんから、同人誌『コスモス』が何冊か送られてきて、この辺りの記憶は、曖昧なのですが、詩を送ってみないか、というような手紙が添えられていたように思います。ところが、『コスモス』に掲載されている詩を何篇か、読んでみて、どうも、気が進まない。あまりいい詩があるようには、思えなかったのです。当時のぼくには、そこに掲載された詩の価値がわからなかったのかもしれません。そうこうするうち、ちょうど、バブルの時代で、仕事の方が、忙しくなり、詩を書くことからさえも、遠ざかってしまい、村松さんとは、とうとう、接触しないまま終わりました。今から思うと、もし、あの頃、会っていたら、人生は、今と少し違うものになっていたかもしれないと思います。

なぜ、そう思うのかは、村松さんの影響を強く受けた人と、その後、十年以上たってから、知りあうことになるからです。その人は、ハン

セン病文学全集の出版活動で、梓出版文化賞の新聞社学芸文化賞を、二〇一〇年に受けた皓星社社長の藤巻修一さんです。藤巻さんとの出会いも、なかなか、現代的で、インターネットの掲示板を通じて知り合ったのでした。藤巻さんからは、村松さんの名前は何度も、聞いていたのですが、自分の出版の師としての村松さんだったり、ハンセン病や朝鮮問題に深く関与した村松さんだったりして、ぼくが二十代の頃、ニアミスした詩人、村松武司とどうしても結びつかず、まったく不覚なことですが、村松さんの死後、遺品の整理に市川に行った藤巻さんから、ぼくの書いた村松さん宛てのはがきが出て来たことを知らされて、ようやく、ぼくの中で、二人の村松さんが結びついた、というわけです。こうして、今、村松さんについて、お話ししているのは、不思議というより、人間、若い頃と、そう変わらないものなんだなと、二アミスも縁の内と思っている次第です。

1. 村松武司とは誰なのか

村松武司については、関心のある一部の人しか知られていませんので、まずは、どんな人だったのか、その概略を、鳴海英吉との比較で、述べてみたいと思います。

村松は、一九二四年（大正十三年）、京城（現在のソウル）に植民者の三代目として生まれました。鳴海英吉よりも一つ下で、同世代と言っていいでしょう。植民地朝鮮に植民者として生まれたことが、その後の、村松の思想を大きく規定することになりました。一九三八年、十四歳で京城中学入学。一九四一年、高校受験を兼ねて、十七歳で四国へ旅する。この年の十二月に太平洋戦争が始まります。こうした学校との関わりを見て行くと、村松さんは、当時の知識エリートの養成コースに載っていたと言えるように思います。この頃、鳴海英吉は、鶴見の共立自動車に板金工見習として入社します。電気学校の夜間部に入学しますが、十七歳で退学して、劇団に参加します。さらに、十八歳で、治安維持法違反で鶴見署に留置されてしまいます。鳴海英吉の場合、ごく若いうちから、体制のありかたに疑問を持っていたことがわかります。

村松は、一九四四年、二十歳の秋、京城にて招集を受け、十二月に、朝鮮・満州・ソ連国境に電探兵として従軍します。ちなみに、電探兵というのは、国境で、対空レーダーに従事した兵士のことのようです。一九四五年八月、京畿道仁川郊外の電波兵器士官学校で敗戦を迎えます。十月、一家で下関に引き上げます。この頃、鳴海英吉は、北支派遣軍衣師団に入隊し、思想犯と見なされていたため、最前線に送られます。八月の敗戦時に、北朝鮮の感興に移動し、ソ連軍に武装解除され、そのまま、シベリア抑留へと至ります。

敗戦までの村松の軌跡は、大日本帝国の体制内のコースに組み込まれており、鳴海英吉の軌跡と著しい対照を見せています。ただ、そのことで、村松の価値が下がるというものではなく、むしろ、戦前の体制内人間だったことを自己批判した上で、過去ではなく今の植民者の視点から、戦後体制を持続的に批判した点を見逃してはならないでしょう。

戦後、一九四六年、村松は二十二歳で上京し、市川の福田律郎宅に寄寓します。ここで、知り合った井出則夫とともに『純粋詩』を編集することになります。この頃、詩誌『純粋詩』の読者として三年間、詩を投稿していたという仙台在住の伊藤和子さんに、三・一一の震災をまたいで、二度ほど、会うことができました。伊藤さんは、一九四六年の後半に『純粋詩』に入会したといいますから、三月の創刊後間もなく入会していたことになります。当時、山形在住。敗戦のときは、横浜で学生をしていて学徒動員されていたということです。村松とは、『純粋詩』に、山形支部が出来てから、福田律郎宅で十二、三人の同人会がもたれたときに、会っているということです。伊藤さんは、最年少の十八歳だったせいもあり、村松とは、言葉を交わした記憶が、残念ながら、あまりないそうです。今では、顔さえ覚えていない村松が、大きな軍靴を履いていたのは、よく覚えているそうです。地方在住で詩の愛好家だった伊藤さんにとって、村松武司は、憧れの人だったようです。敗戦直後の山形市は、「僻地」という感じだったと伊藤さんは

述べています。そこから見る村松武司は、生身の存在ではなく、「村松武司」という活字の存在だったといいます。「村松武司」という活字の窓から、近代詩の手法を学び、『荒地』の詩人たちの息吹に触れ、戦後の文学状況、外来文化を息もつかぬような緊張と熱っぽさで吸収したと回想しておられます。

『純粋詩』が『造形文学』に変わってから、編集方針が変わり、掲載される詩の傾向が思想的になり、合わなくなったという点や、伊藤さん自身の結核の発病・療養という事態もあり、脱会したといいます。『純粋詩』の山形支部、というのは、ぼくも、初めて聞いたのですが、支部結成は至上命令だったと伊藤さんは述べています。会員の獲得や雑誌の冊数割り当てなどが行われ、雑誌経営上の必要性から、山形支部が結成されたのでしょう。当時の状況は、やはり、戦争で圧迫されていたものが解放された面が強かったと言っておられましたが、それでは、戦前から戦中にかけて、文化的には、暗黒時代・空白期だったのか、というと、そういうわけではない、と伊藤さんは否定します。テレビもパソコンもない時代、百人一首はごく日常的なゲームで、藤村や白秋、啄木、牧水、犀星や晶子などは、お姉さんたちが暗唱していたそうです。出窓で「菩提樹」を歌ったり、蓄音機で音楽を聴いたり、ミレーの絵を見たり、映画「オーケストラの少女」の話で盛り上がったりと、文化の質という点では、現代以上だったのかもしれません。これは、とくに恵まれた家庭の営みではなく、平均的な家庭の営みだったのです。すこし、村松の話から脱線しましたが、伊藤さんのお話は、貴重な時代証言を含んでいますので、紹介させていただきました。

さて、一方、敗戦直後の鳴海英吉は、ナホトカ集結地に至るまで、シベリア地方を転々としながら、強制労働に従事していました。一九四七年八月に舞鶴に上陸、帰国します。この年、九月に『荒地』が創刊されています。翌年四八年九月には『造形文学』が創刊され、村松は、編集・資金繰りに携わることになります。

戦後、詩人や小説家を始め多くの知識人が共産党へ入党し、やがて離れていきますが、共産党との関わりで村松を見てみると、村松も一九四九年に入党しています。五二年には、結核で市川の結核療養所、現在の化研病院へ入院しますが、そこで、所内にパルタイを結成し活動をしています。一方の鳴海英吉も、帰国後一年の四八年に、共産党へ入党します。三多摩地区で文化工作隊として活動をしています。しかし、五五年ごろに、除名されています。村松の場合は、六〇年に共産党を離れます。村松の党在籍は十一年、鳴海は七年だったことになります。戦後、共産党への知識人の入党・離党という現象は、日本だけではなく、フランスなどにも見られる現象です。

村松は五二年三月に創刊された『列島』に創刊同人として参加します。また、五五年には、その後、長く続く編集者生活の第一歩となる小山書店に入社します。三十一歳でした。鳴海英吉は、この頃、福田律郎夫妻と知り合うことになり、二人の人生が福田を介して交差することになるのです（注1）。

六〇年代になると、二人の人生に、はっきりと、戦後体制を根源的に思索し行動しようという志向が出て来ます。村松の場合、朝鮮研究という形で、鳴海の場合、日蓮宗不受不施派の実証的な研究という形で。村松は、六一年に「朝鮮研究所」の設立に参加し、雑誌『朝鮮研究』誌上で活動を始めます。六二年から『朝鮮研究』に、「朝鮮植民者」を連載していきます。これは、自分の祖父で植民者の第一世代だった浦尾文蔵からの聞き書きに、現在時点での村松のコメントを付したものでした。この連載が、いかに、画期的な視点を備えたものであったのか、を理解していただくために、いくつか引用してみます。

> 名もなき、とるに足らぬ男の一生である、一般に想像される植民者というイメージ、鞭とサーベルを持ち、残忍なものを内にかくし、開拓精神に燃えた男性像からは、およそ遠い存在である。…（中略）…彼は二十一歳で朝鮮に渡った。彼は冒険的に一旗あげようとしたのかもしれない。だが、それだけではあるまい。故郷で一生を送るみじめさに我慢がならなかったのであろう。そう

いう人間が、ひとたび「韓」に上陸すると、たちまち自由な、商才ゆたかな若者に一変する。…（中略）…その祖父が、朝鮮を愛そうとしながら自分を裏切ってゆく過程を、わたしは正直に記してゆきたい。『朝鮮植民者』（村松武司著作集『海のタリョン』所収Ｐ．２３４）

庶民が故郷の諸関係から切り離されて植民者になったときの変貌が、的確に述べられています。一庶民がなぜ、自分の故郷を捨てたのか、そして、植民者になるというのは、どういうことなのか。これが端的に述べられています。

この本は前に述べたように、歴史的に著名な人物の一生ではない。平凡なひとりの植民者の素描にすぎない。しかし、これをここに提出しようとする目的は、ひとつある。多くの植民者がいたにもかかわらず、いまその記録が近・現代史から欠落している。このまま放置すれば彼らの歴史は失われてしまうであろう。彼らを眠らせてしまうのはかまわないが、日本の現代の意味をつかむために、大切な歴史の支流を無視することになりはしないか、とおそれる。この支流にはアジアの近現代史のなかで、日本はどのような存在であったか、という日本の相貌が映されている。たんに植民者を「帝国主義的な侵略者たち」というのはやさしいが、それだけでは、われわれ自身、ひいては日本の民衆自身もどのような姿をしていたか、肝心な像が虚像に終わってしまう。…（中略）…ここでわたしが意図するのは、祖父の歴史とわたしの現在とを区別しないこと。過去を過ぎ去ったものとして葬らず、ふたたび墓場から引き出すことである。したがって、これは日本の過去の植民史なのではない、現在の植民主義的状況を示す。『朝鮮植民者』（村松武司著作集『海のタリョン』所収Ｐ．２３４－２３５）

村松の民衆を重視した歴史観や思想的特徴であるアクチュアリティの重視がよく出ています。「日本の過去の植民史ではなく、現在の植民主義的状況を示す」という村松の言葉は、二重の意味で、重いものです。それは、現在の日本の朝鮮に対する植民地主義が終わっていないことを示すだけではなく、アメリカや多国籍企業による日本の被植民主義的状況も逆照射する一般性を持っているからです。また、のちほど、検討しますが、日本の植民地主義は、朝鮮・中国・台湾の植民地化といった海外での植民地経営だけではなく、北海道開拓、琉球併合といった国内の植民地経営を先行モデルとして持っており（注2）、その意味で、日本の近代化とパラレルに進んで来た、と言うことができるからです。それは、三・一一以降、はっきりした、原子力発電所の周辺立地戦略と都市との関係とも深く関連しています。そして、これらを、推し進めることができた背景には、皇国史観、近代、安全神話、経済性神話というイデオロギーの問題が横たわっており、裏には莫大な利益を上げる体制がそれぞれに隠されているという点を指摘しておきたいと思います。植民地問題も原発問題も、イデオロギーの問題であると同時に、具体的な体制の問題でもあるのです。

引用を続けます。

ひとりは日本の植民者。ひとりはドイツ・ファシスト。二十年たてば、ひとりは日本の地質学者であり、ひとりは西ドイツの同学の研究者である。そのふたりは、よく競い、長い砂漠の道のりに耐えて、目標地点に到達した。この象徴的な行進の途中で、どうして第二次大戦の経験者、かつての「盟邦」の青年たちが、戦争について語らなかったといえるか。正直に言ってほしいのだ。かりに話題にならなかったとしても、次のことだけは記憶しておかねばならぬ。

この徒歩競争は、まことに象徴的だ。第二次大戦を境とする日本とドイツの姿そのままである。そして、同時に、彼らが戦争に

ついて語らなかったとすれば、二重に象徴的だ。植民主義とファシズムが、共に過去を「記憶」しないという共通性を持つということにおいて。

ナチズムは、大量殺戮の残酷さにおいて有名だ。しかし、ナチ・ドイツは滅びても、ナチの人類に与えた恐怖は滅びぬ。忘れられてはならない。しかし、いま、大量殺戮の怖ろしさを、ひとりのナチ党員が知らずに行ったということを、どのようにわれわれは想像すればよいであろうか。すべてわれわれ自身と同じ、食物も様相も変わるところのない人間たちが、大量殺戮を敢えて行うには、ひとりびとりのナチ党員のなかに、たんに自己への裏切り、自己欺瞞などに支えられて実行できないほどの重さと恐怖がある。にもかかわらず、なぜ、そのようなことが起こりえたか？

人殺しを、彼らの日常の中で毎日、忘れ得たからである（注3）。…（中略）…かつて、日々の「忘却」が、大量殺人を可能にした。今後も民族の過去の「忘却」によってふたたびファシズムを再生させることが可能になる。「もはや戦後ではない」と誰が言ったか考えなければならないだろう。

『朝鮮植民者』（村松武司著作集『海のタリョン』所収Ｐ．３２４）

ここでは、「忘却」という重要な問題が語られています。これは、小林秀雄（一九〇二・一九八三）の「歴史とは畢竟思い出に過ぎない」という有名な言葉や、亀井勝一郎（一九〇七・一九六六）の聖母マリア像と百済観音像を比較した忘却をめぐる議論と鋭く対立します（注4）。小林秀雄や亀井勝一郎は、階級という視点を持とうとしないまま、日本文化一般に当てはまるものとして、「忘却」を論じていますが、歴史を忘却する（だから逆に歴史を作りもする）のは、社会の支配層であり、被支配者の歴史は闇の彼方に葬られたままなのではないでしょうか。日々の残虐行為を忘却できるのは、支配層であり、残虐行為を受ける被支配層は記憶し続けるのではないでしょうか。それは、ちょうど、原子力村と経産官僚の三・一一前後の行動を見れば明らかなように、です。この点に、村松と同じように敏感だったのは、ほかならぬ鳴海英吉です。鳴海の不受不施派研究は、まさに、ここに問題意識を持っていると言っていいでしょう（注5）。

さて、村松の年譜を見るとき、四十五年間にわたる編集者という側面を見落とすわけにはいきません。村松を編集者として見たとき、重要な仕事は、雑誌「数理科学」の編集と七六年に立ち上げた「ライと朝鮮文学」をテーマにした梨花書房です。「数理科学」の編集時代のエピソードに、村松の人柄を示すものがあります。「数理科学」の投稿者は、数学者たちでしたが、「フラクタル」の特集号のとき、投稿原稿を印刷所に渡した段階で、すべて紛失してしまったそうです。村松は、原稿をまるごと短編小説に切り替えて、その号を出したというのです。普通は、休号にして、印刷所の責任を追及するところですが、そのどちらもやらずに、ぜんぜん別の大胆不敵な切り抜け方をしています。この話を藤巻さんから聞いたとき、ぼくは、村松が、敗戦直後、京城から工場のあった新村まで、汽車で向ったときのエピソードを思い出しました。復員する朝鮮人と間違われて、朝鮮人兵士たちに取り囲まれ、今後どうすればいいのか、問われたのです。このとき、とっさの機転で、朝鮮人を装いながら、「故郷のすぐれた古老や先輩に会おう」と答えています。後に、嘘を言いながら、これは嘘ではないと思った、と村松は回想しています。朝鮮人ではないとはいえない部分が、自分には存在すると。「フラクタル」特集号の読者からは、苦情は一件も来なかったそうです。

ところで、梨花書房のテーマでもわかるように、村松のもう一つのテーマは、ライでした。村松の朝鮮とライの関係については、「ライはアジア・アフリカだ」という村松の師にあたるプロレタリア詩人、大

江満雄（一九〇六・一九九一）の言葉が、端的に示していると思います。村松は、この言葉を、一九四九年に大江を訪問したとき、初めて聞くことになります。

ライが有史以前にアフリカに発生し、インドに拡がり、その後アジア東部と、他方は地中海東端を回ってヨーロッパに拡大したが、その伝播は、戦争、捕虜、奴隷、貧窮、飢餓において選択的にあらわれるのを教えてくれた。

（村松武司著作集『海のタリョン』Ｐ．５３９）

この言葉には、ライが植民地体制の最底辺に組み込まれ収奪された被支配者であること、そして、ライが存在する、その場所が、まさに、植民地主義が空間的に具体化した場所であることを示唆しています。アジア・アフリカ問題は、国内の問題でもあるわけです。ライの問題は、差別の問題とも関わり、実は、植民地体制というものが、〈他者〉の同一化をめざしながら、限りなく差別化していく構造だったことと符合します。同一化という差別化なのです。ライの問題は、今日は展開する余裕がありませんが、これも、次回以降の課題とさせていただきます。

さて、七〇年代、八〇年代の鳴海英吉の活動は、どうだったのでしょうか。七〇年代の鳴海英吉は、詩人の佐藤文夫さんに勧められて、詩作を本格的に再開します。この時期の大きな特徴は、朗読への関心です。また、不受不施派の研究が、高く評価され、大学講師の職を勧められています。七七年には、研究の集大成と言っていい、増補改訂版『房総禁制宗門史』が刊行されています。

村松は、九〇年の十月に、初めて、朝鮮民主主義人民共和国を訪問します。藤巻さんによると、村松は、統一がなるまでは朝鮮に足を踏み入れないと誓っていたそうです。九〇年の北朝鮮訪問に続き、死の一年前の九二年四月に、再度の北朝鮮の訪問と、二度も北朝鮮を訪れています。このときは、中国経由で行ったようです。また、九二年の八月には、韓国を遠望できる対馬に夫人と旅行しています。死を直前にして、なにか、心境の変化が起きたのでしょうか。懐かしくなったのでしょうか。たぶん、違うでしょう。

レジュメの副題に掲げた「朝鮮を懐かしがってはならない」は、村松と同じ植民者だった、小説家、小林勝の言葉ですが、これは、二人で共有した倫理だと言っていいと思います。しかし、村松は、小林勝の小説「チョッパリ」のあとがきに触れながら、次のように述べています。

「初秋の空」と「プラタナス」。これは単に獄窓から見た風景ではない。彼が選び出した、他の言葉に代置できぬ「朝鮮の影」である。少年時代の小林勝が土埃の舞う果てしのない道で見た朝鮮のプラタナス。彼がひきこまれるような思いで仰いだ朝鮮の紺青の秋の空。この二つの言葉に、小林は育った朝鮮の自然を映し出していたとわたしは考える。そして、自らの禁を破った小林の破綻を責めないで欲しい。むしろ、連帯の鍵はここにある、とわたしは考える……。「朝鮮植民者」（『海のタリョン』Ｐ．３４３）

初秋の空、コスモス、鳳仙花、プラタナス、ポプラ。こういった朝鮮の自然は、二人には、すでに終わった、過去の思い出の中の自然ではなく、現在と過去、過去と現在を媒介するものとしての自然だったのです。小林勝は、「あとがき」の中で、次のように述べています。

……わたしは日本にとっての朝鮮と中国とは、その『過去』から現在へ、現在から『過去』へと連続して生きつづける一つの生きた総体として考えるのです。

「朝鮮植民者」（『海のタリョン』Ｐ．３４３-３４４）

最後に、まとめの意味で、四十年のつきあいのあった鶴見俊輔の村松武司評を紹介したいと思います。

村松武司は、いばらない人である。指導者意識のない知識人である。

村松さんを私に紹介したのは、大江満雄さんで、大江満雄さんは、ライの詩人の作品を本に編む仕事をしていた。この仕事に関心を持つことをとおして、私と村松さんのつきあいが生じた。それもほとんど四十年。村松さんはあきない人だった。

いばらないこと、あきないこと、この二つの特色は、日本の知識人の中で、村松さんをきわだった人としている。

もうひとつは朝鮮にたいする関心である。これも村松さんの生涯をとおしてつづいた。『朝鮮植民者』という、実父・実母・義父・義母の伝記（注6）は、日本人として書きにくいことをそのままに書いた信頼できる本である。この巻末の著者が書いた思い出は朝鮮ですごした中学時代にかけて、自分の中に残している自己像が、他人の中に残っている自己像とどのようにかけはなれているかについての文章で、植民者の悲哀を見事に表現している、彼の生涯の活動は、この悲哀からわきでている。（「この人」鶴見俊輔　村松武司著作集『海のタリョン』）

2．なぜ、今、村松武司なのか

現在、日本と朝鮮との間で問題になっているのは、みなさんよくご存じように、従軍慰安婦・竹島・拉致ですね。この三つは、植民地の問題、領土の問題、冷戦構造の問題と、バラバラに見えますが、実は一つの構造です。これらの問題を考えるとき、村松の思想は、今も、アクチュアルな側面を持っています。

今年の七月、新宿のニコンサロンで、従軍慰安婦を撮った安世鴻さんの写真展へ行ってきました。いったんは中止になりましたが、裁判所の仮処分命令で展示が可能になったものです。会場は、空港のボディーチェックと同じ装置が入口に設置され、ガードマンがエレベーター付近と、入口に待機する、ものものしい雰囲気の中にありました。

中国に連行され、日本の敗戦後、そこに残された朝鮮半島出身の元慰安婦の写真には、笑いがほとんどありません。展示数は、少なかったですが、見ているうちに、なんとも言えず、厳粛な気分になってきました（参考資料）。国内では、九三年八月に、河野官房長官談話で、「本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、さらに、官憲等がこれに加担したこともあった」と、慰安婦の募集に、強制や軍の関与を認めていますが、国内では、未だに、従軍慰安婦はいなかった、という議論があります。それは、軍に強制されて慰安婦になったのではない、というところに議論の焦点があります。つまり、理由はどうあれ、民間商人が経営する慰安所に、自主的に、応募してきたのだという理解です（注7）。中国での従軍慰安婦についても、あの小野田元少尉の証言によれば、軍が経営したのではなく、民間が経営し（現地人も混じる）、軍は、衛生面などを管理した、とされています。しかしながら、問題の本質は、軍が経営に関与したかどうかではなく、強制連行されたかどうかでもなく、日本兵を相手にした慰安婦を必要とした植民地体制が存在したことにあるのではないでしょうか。軍の関与に問題の焦点を向かわせることで、戦争の本質や植民地の体制について、思考停止させてしまう。現在の国内の従軍慰安婦をめぐる議論は、そういうマスキング効果を発揮していると考えられます。その意味で、国内の議論は、一つのイデオロギーと化しているのです。

村松は、従軍慰安婦について、次のように述べています。

慰安婦の、まして朝鮮人慰安婦の正しい数字はわからない。しかし従軍慰安婦の歴史は一九三七年七月七日の日中戦争から始まる。日本兵の中国民衆に対する暴行、強姦略奪が外国列強を刺激する。現地民衆の反日感情は高まるばかり。外国からの非難は受けるし占領政策がはかどらない。東京から叱責を受けた中支派遣

軍幹部が、その対応策として考えついたのが、なんと、軍人兵士らに性を支給してやるという案だった。それ以前に、日本軍はシベリア出兵で苦い経験を持っていた。七万二千の軍隊のうち、重症性病患者、二千、軽症とはいえ、戦闘に支障をきたすもの、一万四千を数えたという。実に二割を越す「皇軍兵士」が性病にかかった。だから日本軍はこれにこりて部隊長名で慰安所を設置し出入票を与え、軍医の管理責任において定期検査が行われた。

いったい戦地で（それは日本軍にかぎらないが）なぜ強姦をふくむ性行為の多くがなされたのか。性行為ののち殺したのか、慰安所を設置するほど、軍人に性のはけぐちが必要だったのか。そのどれをとりあげても、みじかい自分の戦場経験をふり返っただけでは想像できない。

当時の戦場経験者に尋ねると、慰安所が存在したこと、そこに出入りしたことを認めながら暴力的な異常な性行動があったことは語らない。住民を犯した後は殺せ、という言葉は命令・指示・教唆の形で憶えていても、殺した、殺すほうがよい、という自分の言葉にはならない。しかし、生きて帰ってきた兵士は、この影を背負っている。個人の犯罪を集団の犯罪として、個人は罪をのがれようとした。戦争裁判で問われたのはそのことではなかったか。

平時と戦時は連続的につながっている。にもかかわらず、私の問いに答えた人は、戦時の性を特別視する。日本内地の遊郭での遊びと慰安婦との交渉は同次元にない。平時と戦時との間の断絶を主張しようとする。

私は―人によって見解は違うかもしれないが―売買春にあっては、売る権利はあっても買う権利の主張はできないと考える。これに反して、売る権利を持たぬものに対して、買う権利のみがある場合、性は成立しない。成立しないはずの性が、しかし今日横行している従軍慰安婦たちは、この後者の地位に遂にやられた。しかも「大義」という公認の名で。

（村松武司著作集『海のタリョン』P．584-585）

村松の「売買春にあっては、売る権利はあっても買う権利の主張はできないと考える。」という論点。また、「これに反して、売る権利を持たぬものに対して、買う権利のみがある場合、性は成立しない。成立しないはずの性が、しかし今日横行している従軍慰安婦たちは、この後者の地位に遂にやられた。」という論点に注目したいと思います。売買春において、堂々と「性を買う権利の主張」ができた社会体制、成立しないはずの性に従軍慰安婦が追いやられた社会体制こそが、植民地体制であり、侵略戦争の本質だったのではないでしょうか。

3．朝鮮の植民地経営を見る枠組みの提示

第一章でも触れたように、柄谷行人は、朝鮮植民地経営の先行モデルを北海道経営に見ています。そして、北海道の農政学を、アメリカを手本にしたと考えています。この三者に共通するのは、〈他者〉の同化政策です、この点が、英仏の支配者／被支配者の区分を明確に残した植民地経営と質的に異なると柄谷は述べています。アメリカは、被統治者を「潜在的アメリカ人」と見なし、その思想的起源をピューリタニズムの「愛」に見ます。インディアンの殺戮と同化を「愛」と述べています。この「愛」の思想を継承したのが、岡倉天心の「アジアは一つ」というスローガンだったと言うのです。日本の植民地主義もアメリカと同じように、被統治者を「潜在的日本人」と見なすと考えています。

朝鮮植民地経営の先行モデルを北海道経営に見ている点は、ある意味、説得力を持つと思いますが、〈同化政策〉の起源が、ピューリタニズムの愛だという議論は、どうでしょうか。たとえば、ローマ帝国で

も早い段階から、被征服地のローマ化は行われていましたし、オーストラリアのアボリジニ政策や中国のチベット政策、フランスのモスリム政策を見ても、同化政策は行われています。これらが、ピューリタニズムの愛をその起源に持ち、媒介にしていると議論をしたとしたら、いささか、説得力を欠くでしょう。同化政策は、世界共通の国家統合政策と言っていいのではないでしょうか。

むしろ、ぼくが強調したいのは、北海道開拓や朝鮮の植民地化に見られる〈進んだ地域―遅れた地域〉という近代的な進歩史観にある区分です。そこに起源を持つ同化と差別の一体化です。ここには、「遅れた地域」を開拓・植民し進んだ地域へ底上げするという独善と、未開人という差別が潜んでいます。「未開人」ですから、殺戮や収奪、強制移住や差別に、なんの痛みも感じないというわけです。同化について、一つ指摘しなければならないのは、同化とは、〈他者〉と平等な社会関係を構築することではなく、〈他者〉を階級社会の底辺に組み込むことを同化と言っているにすぎない、という点です。ここに、同化が差別と一体化するメカニズムがあります。柄谷行人の「ピューリタニズムの愛」は、逆に、階級社会に媒介された愛なのです。アイヌや沖縄に、〈和人〉や〈ヤマトンチュ〉という呼称が今も残っていることに、同化の欺瞞性が見てとれます。

資料3から読み取れることの一つは、国民国家（nation-state）の成立と植民地化は、同時的な動きだという点です。一民族一国家という形に、国家の領土を統一・確定しようという動きが、琉球処分と北海道旧土民保護法に他なりません。国民国家の統合は、〈他者〉の抑圧と同化を同時に含みます。現在、日韓・日中の間で外交問題になっている竹島と尖閣諸島も、国民国家という枠組の中で問題化しています。国民国家の成立と同時的に、朝鮮の植民地化が、行われますが、その際、植民地化のスタートになったのは、日朝修好条規といった不平等同条約である点が注目されます。これは、幕末に、アメリカなど西欧諸国との間で、締結した不平等条約を模倣しているのは、明らかです。十九世紀末から、二十世紀初頭にかけて、ヨーロッパ諸国も、国民国家の統一と植民地化が同時に進行した時代にあたります。日本の植民地政策を評して、欧米の植民地化を免れるために仕方がなかったという言説が今でも見られますが、むしろ、均質な国民国家の出現は、階級社会との矛盾をはらみ、階級社会から脱落した人々を生み出すことで、外部への膨張圧力が、国民国家の内部に始めから組み込まれていたと考えるべきでしょう。そして、その方法は、帝国主義の模倣であり、植民地内部には、同化と差別という矛盾した契機を持つ階級社会が残ったままでした。国内では、「近代の超克」が議論されながらも、国家の行動は、どこまでも、「近代」をめざしていたと言えるのではないでしょうか。

帝国の統合には、天皇を中心にした皇民化教育と日本を神の国とする皇国史観イデオロギーが一体として要請されましたが、現在の原発問題でも、「安全神話」、「経済性神話」として、国とメディア、学者、経団連などが、イデオローグとなっています。そして、その目的は、帝国内の階級社会の維持と同じように、電力会社などの独占資本を中心にした階級構造の維持にあります。「植民地主義は、一つの体制である」とはサルトルの言葉ですが、「洗練された帝国主義」は、知らないうちに、原子力村を中心とした一つの体制を作り上げ、それが現在も続いているのです。この変奏が、広島・長崎の被爆者問題であり、アイヌ問題であり、沖縄基地問題でもあるでしょう。村松に倣って言えば、植民地問題は、過去の歴史ではなく、「洗練された帝国主義」という形を取った現在進行中のアクチュアルな問題だと言えるのです。

今回、準備ができませんでしたが、アメリカの帝国主義の成立とアジアの動きの連関については、現代的な問題をはらみ、重要な論点です。現在の日本の「洗練された帝国主義」は、グローバリゼーションという名のアメリカ発の新植民地主義の枠内で動いています。その現代的な象徴がＴＰＰであり、遺伝子組換の多国籍企業モンサント社の日本進出です。

日本の優れた経済学者の一人、宇沢弘文さんは、アメリカによる、日本の植民地化のプロセスを次のように、述べています。

日本の場合、占領政策のひずみが戦後六十年以上残っている。アメリカの日本占領の基本政策は、日本を植民地化することだった。そのために、まず官僚を公職追放で徹底的に脅し、占領軍の意のままに動く官僚に育てる。同時に二つの基本政策があった。一つは、アメリカの自動車産業が戦争中に自らの利益を度外視して、国のために協力したという名目を作って、戦後日本のマーケットをアメリカの自動車産業に褒美として差し出す。もう一つは、農業で、日本の農村を、当時余剰生産物に困っていたアメリカとは競争できない形にする。…（中略）…一九八九年七月に開かれた「日米構造協議」は、アメリカの対日貿易赤字の根本原因は、日本市場の閉鎖性、特異性にあるとし、経済的、商業的側面をはるかに超えて、社会、文化などを含めて日本の国のあり方全般にわたって「改革」を迫るものでした。

日米構造協議の核心は、日本にＧＮＰの一〇％を公共投資に当てろという要求でした。しかも、その公共投資は決して日本経済の生産性を上げるために使ってはいけない、全く無駄なことに使えという信じられない要求でした。…（中略）…一九九四年にはさらに二〇〇兆円追加して、最終的には六三〇兆円の公共投資を経済生産性を高めないように行うことを政府として公的に約束したのです。まさに、日本の植民地化を象徴するものです。『始まっている未来』Ｐ．41-42 宇沢弘文、内橋克人著（岩波書店二〇〇九年）

このように、植民地主義は、過去のものではなく、現在のものであり、帝国主義は洗練された形を取りつつ、国民国家の枠の内外に植民地を作りながら、現在も、重層的に搾取していることがわかります。

最後に、ぼくの好きな村松武司の詩を朗読して終わります。

敗北　　**村松武司**

おじさん覚えているか／あんたの頭蓋骨におれの足が／おたれかかって骨になりかけているのを／／舞いそうもなく捨てられる／あんたの死に、感動も花もなく／おれは腐れかけた片足を置いているが／あんたはもう覚えていない／雪の上の仮眠、のこり火の又銃（さいゆう）／革命は盗みとられたのか／消えたのか／／盗みとったのは、おじさん／あんたかもしれなかった／知らずにいることを必要とした／ながいながい党の仮眠　明るい草原の夢／黒人、被圧迫者、第三世界以外の／こちら側で／なかば犠牲者、なかば共犯者が／永遠の解放の歌をうたった／／のこり火が焔をあげる／あんたの骨も揺れる／ひとりびとりの人間の死が孤独で、異常で／地上の勝利を願ってもひき返す術もないとき／あんたは全面的敗北のなかで斃れる／革命がかつて旗の名まえであったとき／１９９０年のいま／神経症の名まえかもしれぬのだ／／どんな兵士もみんな、自分を／つねに死者と見做す／むごく、人間の終わったところから／自分に、進め！　とささやく／まっくらななかで／／ようやく火が消えようとする　おじさん／灰のなかに沁みこむ一滴の感傷／そのなかから片足をぬき　立とうとする／解放する者ではなく／されるものたちの村へ、向おうとするが。

（拍手）

注１　ただ、筆者が村松のテキストを読んだかぎり、鳴海英吉に触れた個所はありませんでした。村松に近かった藤巻修一氏に、確認したところ、やはり、村松の口から「鳴海英吉」の名前が出たことはなかったということです。しかし、お互いの名前は、福田律郎の口から聞いていたと見るのが自然でしょう。九月八日の講演会当日に、直接、佐藤文夫さんから、伺ったところでは、鳴海英吉の口から、村松の名

前はしきりに聞かれた、とのことです。

注2　柄谷行人は、日本の植民地経営の起源を北海道に見ています。そして、北海道の植民地農政学のモデルをアメリカ農業に見ています。アメリカは、日本と並行して、帝国主義に転じ、被統治者を潜在的なアメリカ人と見なし、支配しながら、自由を教えるかのようにふるまい、英仏の植民地政策とは異なる同一性イデオロギーの起源となりました。日本の植民地経営は、この同一性イデオロギーを引き継いでいる、と柄谷は述べています。この論点は、検討に値する重要な問題を含んでいますので、北海道・沖縄・朝鮮・アメリカという枠組みに拡大して、後に少し触れます。柄谷の出典は「日本植民地主義の起源（一九九二）」（『ヒューモアとしての唯物論』一九九九）

注3　これは、ポーランド生まれで、イギリスへ亡命したユダヤ系社会学者、ジグムント・バウマン（一九二五-）と同じ問題意識です。バウマンは、『近代とホロコースト』（一九八九年）の中で、倫理崩壊の原因を社会的距離化に求めています。たとえば、科学技術の介在は、人間と人間の社会的距離を拡大しました。その典型的な事例が精密な照準装置を備えた航空機による空爆であり、広島・長崎の原爆投下も、この社会的距離化テーゼから、説明することができます。科学技術の介在による距離化だけでなく、民族差別も、また、社会的距離化とも考えられるでしょう。この意味で、村松の議論には、個人的な倫理と社会構造の間に断絶があり、「忘却」防止が個人的な努力に帰せられてしまう面があります。もちろん、個人の倫理は大事ですが、そこに問題のすべてを帰してしまうと、個人を動かしている社会関係への認識を見失わせ、結果的に、個人の行動を変える契機も失うことになりかねません。その意味で、バウマンのような社会理論的な発想は重要です。奇しくも、村松と鳴海とバウマンは同世代です。この論点は、ナチのホロコーストを扱ったユダヤ人、バウマンと朝鮮植民者、村松との比較という観点から、今後、展開してみたいと考えています。

注4　亀井勝一郎は、函館の生家の近くの聖母マリア像を、受苦の像、歴史を記憶する像と考え、百済観音像を微笑の像、歴史を忘却する像と考えました。小林秀雄や亀井勝一郎は、日本の近代を考える上で象徴的な人物で、近代をめぐる様々な問題が集約的に現れています。次回、機会があったら、近代批判者である村松武司・鳴海英吉と反近代主義者である小林秀雄や亀井勝一郎などを、「近代の超克論」を中心に、比較検討してみたいと思っています。

注5　鳴海英吉は、「仏教による抵抗の伝統　ぼくはなぜ日蓮宗不受不施派に注目したか」（『思想の科学』一九六七年十二月号所収）の中で次のように述べています。「この不受不施派の信仰の自由を守る抵抗を、歴史は正当に評価していないようです。それは、この宗門を異端とするためでしょう。宗教史が、聖人伝、寺院の由来記で埋められている現在では、この民衆が支えた宗門は異端です。宗教というと否定しさるのが進歩的であるとすれば、これは大変な間違いを冒します。日本人の精神形成に宗教の果たした課題は大きく、今更それが抜き差しならないとすれば、それを追求してゆくことが重要です。日常生活の中にたくさんの宗教的な行事を持つ日本人の宗教性は実は知らない間に骨肉として持っているはずです。特に邪宗門は、如何なる権力にも屈しない民衆の強靱性を教えます。この宗門は民衆が支え切ったものです。」

注6　これは村松武司の母方の祖父、浦尾文蔵の口述を元にした伝記の間違い。

注7　従軍慰安婦の存在には、確証性がないという国内議論の論拠は、一つには、日本政府・旧軍の公文書がないことですが、敗戦直後、国内官庁や朝鮮総督府では、重要文書が焼却されてしまった点を考える必要があるでしょう。また、ソウルの日本大使館前で毎週土曜日に行われてきた、元慰安婦だった女性たちの抗議行動が、去年の十二月で千回に達したことは、従軍慰安が現実に存在したことを強く物語るものでしょう（国際政治学者、坂本義和氏の意見、東京新聞二〇一二年九月八日）。

鈴木比佐雄（司会）

ありがとうございました。村松武司さんと鳴海英吉さん、この二人を同時代的に比較しながらその試みを論ずるというのは新しい視点でした。この個性的な二人の詩人を見ることで、今日的なさまざまな問題を考えさせられます。ますますこれを深めていって、投げかけたものを考えていきたいと思います。非常にいい講演だったと思います。

では、休憩に入ります。

（休憩）

〈第二部 スピーチと鳴海英吉の詩の朗読〉

佐相憲一（司会）

今日は本当にお忙しいところをご来場ありがとうございます。第二部を始めたいと思います。

先ほどの講演ですけれども、佐藤文夫さんのお話をお聞きして、さまざまな鳴海英吉の詩の特長を学びながら、今の世の中でも鳴海英吉のように思っていることをバーンと言うことが大事だなと感じました。

尾内達也さんのお話からは、村松武司のようなすぐれた詩人を、ただ過去の詩の世界に閉じ込めないで、今の世の中、特に日韓、日中関係などが問題になっていますので、大変今日的な、アクチュアルな意義をもつものとしてとらえることができました。

大変勉強になりました。お二人の方、いいお話をありがとうございました。

さて、第二部は、スピーチと鳴海英吉の詩の朗読です。まず、トップバッターはたけうちようこさんです。たけうちさんはいつもコールサックにご理解ご協力くださっています。前回二年前にここの三階で行いました第五回鳴海英吉研究会で、山岡和範さんが鳴海英吉の「きょうちくとう・八月」という詩を読まれたのですけれども、それが「コールサック」に再録されて、それをたけうちさんはご覧になって、また、鈴木比佐雄さんの講演などもお聞きになって、それで図書館で『鳴海英吉全詩集』を借りられたという、大変熱心な方です。また、昨年秋の『命が危ない３１１人詩集』記念会にもご参加いただき、そこでも鳴海英吉の詩に触れられました。では、たけうちようこさん、お願いいたします。

たけうちようこ

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきましたたけうちようこと申します。私はこの鳴海英吉研究会には初めて参加させていただきました。今、佐藤さんと尾内さんの講演をお聞きして、何か大論文を読み終えたような心地よさがあるのです。私が鈴木比佐雄さんとお会いしたのは三年前の二〇〇九年九月十六日、この市川文学プラザで、鈴木さんの「戦後詩を切り拓いた市川の詩人たち」という大変魅力的なお話を聞きました。私はそれまで、中学生の頃は多少詩を書いていたんですけれども、それからずっと忘れていて、その時の鈴木さんのお話に大変びっくりしてしまったんです。それで、「コールサック」六十五号号から読者になりました。六十八号でさっき佐相さんがおっしゃった鳴海英吉の詩を読みまして、非常に衝撃を受けました。私はしばらくずっと詩というものを書けなかったんですけれども、このコールサックの表紙にある「詩の降り注ぐ場所」じゃないですけれども、降り注ぐというほどじゃなかったですけれども、降ってきましたね、私の中に詩が。それで、「遠い日の夾竹桃」という詩があっと言う間に生まれました。その作品を『命が危ない３１１人詩集』に送りまして、第八章のところに採っていただいたんです。ありがとうございました。

先ほど、尾内さんも「ご縁」ということをおっしゃっていましたけれども、私は市川に住んでもう六年になりますが、この市川文学プラザでサポーターということでボランティアをやっています。先ほどからこちらにもおみえになっています文学プラザの根岸英之さんなどにお世話になっております。ご縁ということで、最初に鳴海英吉さんの

ことをお聞きした時に、市川にお住まいの中津攸子さんもお話になって、確か宗左近さんのことをお話になりました。宗左近さんは私が市川に住む一年くらい前に亡くなられていますが、宗左近さんのことは存じ上げていましたが、鳴海英吉さんのことはその時はじめてお聞きしました。それが全ての始まりだったんです。それから、私が市川に来てからかかっている病院は市川市民診療所といいまして、大島朋光さんが所長をされているんですね。その大島さんの亡くなったお父様は詩人の大島博光なんですね。私も長野の松代というところに、どういう所で博光さんの詩が生まれたのかなと思いまして、行ってみました。素晴らしい桃源郷のようなところでした。博光さんの詩は、『鎮魂詩四〇四人集』にも二つ載っていました。大島博光記念館に行きました。それで、二〇一〇年の四月だったと思いますが、隣の船橋市で「大島博光先生生誕百年のお祝いの会」が開かれて、私も行きました。そうしましたら、土井大助さんがゲストでお話されました。その時はまだ私は土井さんと鳴海英吉さんの関係は知りませんでしたが、土井さんの『末期戦中派の風来記』という本が出たということで、そこで私はその本を買いました。それで帰ってきたんですけれども、私の中で『鳴海英吉全詩集』というのがたまらなくほしくなったんですね。コールサックの佐相さんのところに電話しました。そうしましたら、佐相さんがご丁寧にたくさんの鳴海英吉関係のコピーを送ってくださったんです。そこになんと、土井大助さんが鳴海さんの全詩集の栞に「詩人・鳴海英吉のこと」って書いていたんですね。びっくりしてしまったんですね。こないだ大島さんのお話をお聞きしてきた人は鳴海さんを知っている人だったんだってね。大島朋光さんに「先生、この間、『鎮魂詩四〇四人集』を読んだんですけれども、お父様の詩が載っていたんですけれども、ご存じですか」って勇気をもって聞いてみたんです。「はい、知っています」とおっしゃって、ああ、この病院にかかっていてよかったなと思ったほどでした。

もう一つお話したいのは、鳴海さんからちょっと離れますけれども、鈴木比佐雄さんと佐相憲一さんのことです。

鈴木さんは『鳴海英吉全詩集』の解説を三十ページも書かれているんですよね。そのリアルさに本当にすごいなあと思いました。鈴木さんが二〇一一年四月に出された詩論集『詩人の深層探求』も読ませていただいたんですけれども、すごくキャッチが早いと、スピード感を感じました。詩の評論以外にもいま起きていることも素早くつかんで、論じて、こんなすごい人がいるんだなと。このコールサックについていこうと思いました。私は年金暮らしのボランティアですから、できることは限られていますけれども、出来る限り、協力させてもらおうと思います。

佐相さんは、直接初めてお会いしたのは去年のアンソロジー記念会の時でしたけれども、その前からお電話などでお話していると、とても温かい方で、佐相さんが昨年十二月に出された詩論集『21世紀の詩想の港』を感動して読ませていただいて、この若さでいろいろな経験をされているのに、我々に投げかけてくれるのは我々と同じ目線だなあと思います。終わりの方に「ただ散歩するだけの大切さ」という文章があるんですけれども、ただ散歩するのは簡単のようですけれども、そこには深い意味があって、いろいろな場があるけれども、みんな人間なんだよ、と同じ目線で私たちに言ってくださっているようでした。

鈴木さんや佐相さんとご縁があったのかしらと思います。本当にここ三、四年のことです。

それでは、鳴海英吉さんの詩の朗読をさせていただきます。

きょうちくとう・八月　　**鳴海　英吉**

空襲で焼け出されて　横浜から千葉／その家に　シベリヤから復員してきた／庭にきょうちくとうが　咲いていた／／ただいまって　言ったら／あと　何も言うことがない／仕方がないから　おれの本はと聞くと／遺品と書かれた　ミカン箱が置かれる／／茶

色の　改造社文庫／レーニン主義の基礎　昭和七年発行／生き抜いた　涙は出さないが泣いた／／ちーん　鐘の音がするから／ふりむくと　押し入れの中に　仏壇／鮮やかな桃色　きょうちくとう一輪と／おれの　位牌があった

ありがとうございました。

（拍手）

佐相憲一（司会）

たけうちようこさん、ありがとうございました。ありがたくて、汗が出てきましたけれども（笑い）、コールサックの宣伝をしていただいて恐縮です。これからもよろしくお願いいたします。

さて、鳴海英吉は本当に偉大なんですけれども、残っている本もこれしかないですし、今後どういう形で世に伝え、のこしていくかというのが大事になってきます。本でもう一回出すというのも作戦を練らなくてはならないですが、やはり若い世代に伝えていくということがすごく大事だと思うんですね。いまの詩の世界を見ますと、若いすぐれた人はけっこういるんですけれども、どうしても全体の年齢構成といいますか、重圧みたいなものがあって、若い人たちが自由に前面に出てこれないようなところに、私は批判的意見をもっています。その点で、「コールサック」は二十代の詩人から八十代、九十代と、幅広い人たちが詩の心で伝えあうというのを大事にしています。

今日はその中から、とびきり新鮮な若い書き手、本格的に詩を書いて間もない、北原亜稀人さんに来ていただきました。最新の「コールサック」七十三号に小詩集数篇を書かれています。いろいろと仕事で苦労されてきて、現在はタクシー運転手をされています。今日はタクシー労働を休んでここへ来てくださいました。私がお貸しした『鳴海英吉全詩集』を熱心に読んでくれて、日頃はインターネットでコールサックの本を宣伝してくださってもいます。では、北原さんの朗読デビューです。どうぞ。

北原亜稀人

ご紹介あずかりました北原亜稀人と申します。今日はテーマが「ご縁」のようなので、少しだけご縁のお話をしようと思います。私の友人に路上で絵を書いているものがいるんですけれども、その人がですね、道端で面白い詩人に遭ったという連絡をもらいまして、そこでお会いしたのが井上優さんという詩人でした。その井上優さんからコールサック社さんをご紹介いただきました。私は「キズナバコ」というインターネット上のウェブ・サイトをやっていまして、コールサック社さんをはじめとしていろいろな本をお預かりしまして、ウェブ上で代理販売をさせていただいております。今、本屋さんでなかなか詩集を売っていないという現状がありますので、これまで詩に触れる機会がなかった人たちに詩集などを読んでもらえるようにということでやっております。

最近、「コールサック」の七十一号から、私の詩を掲載していただいております。まだまだ修行中で恥ずかしい限りですが、今日司会をされている佐相さんに御指導いただきまして、書いております。

詩の世界の修行中ですので、今日も見当違いのことを述べるかもしれませんが、なまあかたたく見守っていただければと思います。

この『鳴海英吉全詩集』、初めて読ませていただいたんですけれども、視点の扱い方ですね、それがすごく特長的で、物語的かつ動的だなと感じた次第です。現在の詩の世界に対しての私のイメージは、どちらかと言うと、自己の内面を一つの基点にして静止画的な度数を高めていったもの、細かなものにスポットを当てて静止画的な描き方をされる方のほうが多いのかなというものでした。それに対して、鳴海英吉さんの詩というのは動画的、物語的なんですね。鳴海英吉さんの一つの世界の中の登場人物としてご自身の一人称の視点がしっかり機能しています。著者が対面した現実が一つの物語の断片であるかのように展開していく、そういった印象を抱きます。

その中でも、今回私が特に取り上げさせていただきたく感じました

のが、「河」という詩です。不慣れではありますが、読ませていただきたいと思います。

河　　鳴海　英吉

手を頭の上におけ　と言われた／河岸の草いきれのなかに　座る／手を降ろすな　射殺する　と言われた／／細い葦に似た水草をくぐり／小さな木箱が流れてきて／ひいひいと　ひきつる細い声を／おれは木箱の中から聞いた／／パァンパァン／面白そうに笑い合いながら／ソ連兵が木箱を標的にうちはじめると／木箱から白いボロきれのようなものが／血に染まりながら　河の中に沈んだ／やめろ！　おれは立ち上ったとき／ソ連兵に同行していた中国兵の銃口が／ぴったりとソ連兵を照準し　殺すなと言った／めまいする八月の河／うすく煙だけが巻きあがる上流／日本人の開拓武装集団が全滅した／銃口でその方向を示して　中国兵は言う／没法子（メンハーズ）！／／他人のために　はじめて／おれは　なむあみだぶつ　と言った／頭に乗せた手の指を組み／奇妙な恰好で　おれは念仏を言った／浮んできた　赤ん坊の閉じた眼を／そっとあけてみた／うすい水のよう涙が　綺麗にながれる／おれの河は　そのとき　ゆっくりと淀み／土気色のまま　胸から唇にあふれようとする／おれは何故か唇を噛み／血にぬれた木箱を河の中央に押して／乾く八月の銃口の前に立った

昔の歌ではないですけれど、私はいわゆる戦争を知らない世代です。戦争という単語は私にとって画面の向こう側、スクリーンの向こう側、本の向こう側といった感じで、どうしても外側の世界になってしまうんですけれども、日常、当事者として想像することは大変難しいと思うんですけれども、このような詩、あるいは戦争に関する物語などを読んだりすることによって、それがいかに危険な暴力であるかということは分かってきます。話し合いで解決できないから、じゃあ戦争だ、殴りかかるぞというのは野蛮なことですし、経済的な事情、あるいは内政的な問題に対面するための劇薬として、平和的解決はできないものとみなして、戦争を始めますよというケースもあるようです。その渦中で死んでいく命と全く向き合っていない。それはやっぱりおかしいなと私も感じるわけです。戦争を知らない人間でもそれぐらいのことは分かると思うんですけれども、最近はどうも不穏な空気の流れが見え隠れしておりまして、これはいわゆる「先進」諸国全般に言えることなんですけれども、経済的に行き詰まっている厳しい状況の中で、右傾化が非常に顕著になっているようです。ひとつタガが外れてしまえば第三次世界大戦になってしまうというのもありえるそういう状況です。そういう時代だからこそ、それこそ鳴海英吉さんの詩などもそうですけれども、文化で、戦争というもので何があったのか、何が失われたのか、といったことを伝えていかなくてはいけないと思います。インターネットの世界で今何が起こっているかと言うと、もう開戦してしまえとか、中国と尖閣沖で開戦したら勝つぞとか、そんなことが今どんどんどんどん匿名で拡散されているんです。それがもう世の中の流れであるかのように拡散されていて、とんでもない話ですけれども、そういった中で、戦争というものが何をもたらすのかということをじっくり探していく中で、戦争に関する詩ですとか出版されている本、そういったものをどんどん広げていって、短絡的にすぐ戦争だなんてことにならないでじっくり考える、そういう人たちを少しでも増やしていくことができればと考えております。私も私なりの活動を今後も続けていきたいと思っております。勉強してですね、少しでも状況を変えていけたらなと思っております。

どうぞありがとうございました。

（拍手）

佐相憲一（司会）

北原亜稀人さん、ありがとうございました。「すごく緊張している」なんておっしゃっていましたが、いいスピーチと朗読だったじゃあり

ませんか、心配いらないじゃないですか（笑い）。

続きまして、前回もご登場いただきました山佐木進さんにお願いいたします。前回はどんなお話をされたかというと、仏教徒の鳴海英吉さんが戦場で見たクリスチャンのことを山佐木さん流に分析されました。今回はどんなお話をいただけるか楽しみです。よろしくお願いいたします。

山佐木進

山佐木進です。よろしくお願いします。

鳴海さんと知り合いましたのは、千葉県現代詩人会というのがあったのですが、私も入りまして、その時に知り合ったのと、「光芒」という同人誌でしばらくいっしょでした。仕事の関係であまり詩の集まりには出られなかったんですけれども、誰かの出版記念会か何かの時に、鳴海英吉さんと出会いました。

この『ナホトカ集結地にて』にですね、ワニプロダクションの中山清さんがですね、「俺に何があるのですか、酔っぱらって言うほかに」と書いています。いつもだいたいお酒飲む時ですから、そんなに詳しくは知らなかったのですが、鳴海さんの全詩集が出て、いろいろおしえてもらったものもあります。その中の資料にあるんですが、鳴海さんて、詩集を十冊以上出しているんです。そのうち八冊が手作りの私家版なんです。こんなに詩集を出しているなんて知りませんでしたね。やはり詩人というのはその場その場で、いろいろなテーマで詩集を出して行くんだなと思いました。

鳴海さんの特徴というのは宗教性だと思いますね。あるエッセイの中に、こういうことを言っています。「一人の仏教徒として、〈みほとけ〉という概念を考えています。人間は本来、仏身であると」信じていて、「それをおかすものへのたたかい」ということを書いています。いろいろなナホトカなんかの経験でも、そういう〈みほとけ〉という概念でいろいろなものを見てきた。普通の人間には感じられないものを見れたんじゃないかなと、私は思います。そういう意味でこの宗教性というのは大事だなと思います。人間の根源的な問題じゃないかなと思います。先ほど、司会の佐相さんが言われていましたけれども、前回の私の話で、クリスチャンの話をしました。牧師さんが兵隊にとられて、その牧師さんが、いろいろな決まりのことでそれじゃだめだと言うわけです。そういう詩が鳴海さんにあったんですけれども、鳴海さんは仏教徒ですけれども、ものごとを根源的に感じていくという宗教性があります。そういうものがないと、人間ちょっとかったるいなと、私も感じます。

朗読ですけれども、私が一番好きな詩は「花」という詩なんですけれども、宗教性の話をしましたので、『念仏』という詩集に入っている「銭念仏」という面白い詩を読ませていただきます。

銭念仏　　**鳴海　英吉**

生きながら死して・・・・・・生ぜしもひとりなり　死するも独りなり

一遍

かんおけに　入った／これだけの空間で／人間　死ねる／それでいい／会葬者が泣いている／香典の不足を補う／涙　濡れたハンカチ／端から乾いている／お布施が高いから／お坊さん　頼むなかれ／おれ　死人そのものだから／念仏は　おれ自身が唱え／かんおけは　おれが担ぐ／たかが死　お金使うなかれ／会葬者の香典／しっかり貰っておけ／貰ったら　おれのもの／握ったら札束を数えろ／なんまいだあ　なんまいだあ／／鉄扉ぎゅう　滑車ころころ／死人の油で　滑りがいい／おれ　この日のために／おれの生涯　お酒に漬けた／で　アルコール　たっぷり／消毒されたぬけがら／火の付きがいい／生きた汚れを落とし／おれさっぱりする／うふ　ふ　ふ　・・・・・・

先ほど、佐藤さんが鳴海さんの朗読の話をされましたけれども、あ

の人本当に朗読うまかったらしいですね。どうもありがとうございました。

（拍手）

佐相憲一（司会）

山佐木進さん、ありがとうございました。山佐木さんはすぐれた短い詩を書かれます。鳴海さんは長い詩をよく書かれました。お二人に共通しているのは、ユーモアがあるということだと感じます。山佐木さんが鳴海さんのこの「銭念仏」を選ばれたというのもニヤリとさせられて、山佐木さんらしいですね。

さて、続きまして、山中真知子さんと高橋馨さんをご紹介します。鳴海英吉研究会をずっと熱心に支えてくださっていて、今日は、高橋さんにスピーチを、山中さんに朗読をしていただきます。よろしくお願いいたします。

高橋馨

高橋馨と申します。

鳴海さんは、何しろ迫力がありました。それに自信があったらしくて、何かの会合で朗読してくれって言いますと、すごくもったいぶってですね、なかなかやってくれないんですよ。でも、やり始めると、もうすごいですね。度肝を抜かれるといいますか、声が大きいだけじゃなくて、迫力があるといいますか、忘れられませんね。背は小柄なんですけれども、がっしりとした体躯で、調子に乗ってくると、すぐ握手するんですけれども、その握手がまた強くてですね（笑い）、私は華奢なものですから、つぶされるんじゃないかと、もうまさに労働者の手でしたね。「おい、高橋」なんてやられると、肋骨がひびいっちゃうんじゃないかと（笑い）、なるべく離れていた方が無難だなといった次第でした。

それから、酒癖が悪いんですよね、ものすごく。酔っぱらうと、ちょっとつまんないことですぐに腹を立てるんですよ。もう勘弁してよ、って感じで、私なんかは若い頃は鳴海さんが酔っぱらった時は近寄らないことにしていました（笑い）。

そういう彼が別人のようになる姿というのが思い浮かぶことがあるんです。何かこう、とてもしんみりとした感じです。たとえば明治以来の廃仏毀釈を語る時とか、日蓮宗の不受不施派の研究を語るときなんかですね、輝く目つきで、真剣な眼差しになりました。それから、戸惑った時なんかはですね、ある意味ちょっとかわいいようなところもありまして、晩年、鳴海さんは国民文化祭香川で文部大臣奨励賞を受賞しまして、ところが旅費なんかは出ないわけで、こんなものに行っていいものかどうかと周りに聞くわけです。彼は左翼ですから、文部省のものなんかもらっていいのかな、どうなのかな、というそんな時のはにかんだような、照れたような、戸惑ったような、それでいて時々見せる寂しげな表情があるんですよね。そういう対比といいますか、あのものすごい朗読と、真に迫ったリアルな感じ、その根底にあるのは彼一流のはにかみって言うんでしょうか、照れかくしって言うんでしょうか、そのコントラストというのがものすごいんですね。本当はここなんだな、ここから出発しているんだなと思ったことがありました。

これから山中真知子さんに、鳴海さん晩年の『銃の来歴』という詩集から「鬼軍曹」という詩を朗読してもらいますが、今田軍曹という古参兵が出てくるんですが、その人と鳴海さんとの関係を読み取っていただきたいところがあるのです。これはリアリズム詩の激しい詩なんですが、そこにやっぱり鳴海英吉のはにかみっていうか、照れっていうのがどこかにちらっと出てくるんです。今田軍曹というのは粗暴な男なんですが、そんな男にも、鳴海英吉の心に通じる何かがあったんだと思うんです。だからこそ、鳴海さんを酒席に誘ったんだろうなと。ちょっと難しい言葉で言いますと、含羞って言うんですか。根底に共通のものとして含羞があったんだろうなと思うんです。そもそも、この含羞がなかったら、鳴海さんは詩人にならなかっただろうと私は思います。

では、山中さん、朗読お願いします。

山中真知子

鬼軍曹　　鳴海　英吉

おれは大隊でも　二・三番の名射手だそうである　もっとも　おれは　中隊の余計者だったから　中隊本部には居られない　理由は不名誉？　な事だが　入営前にアカだった　身上書に書かれている事らしい　進級はない　万年一等兵　それがなんだって言うのだ射撃は　着弾使役の兵隊を　びっくりさせた一点に弾痕が　集中していて　信じられない　三回やったが同じ　評価は二つに分かれ　着弾を一点に集めるより　実戦では　ばら撒いた方がいい

これは　実戦主義の中隊長の結論であり誰も反対はなかったらしい　部隊射撃大会要員　それよりも　逃亡が心配である　なぜ射撃が良いのか分からない　射撃は「霜を置く静けさ」と言うそう言えば　軽機の反動を緩めるために足の角度を深くして　呼吸をとめ　なにかを狙う　なにを狙い　なにを撃つのか　おれは知らない

今田軍曹は　他隊だが　大隊一番の名射手　または鬼軍曹と呼ばれている　酒乱で　若い兵隊を　殴る・蹴る　兵舎を抜ける　顔が赤黒い四角だから　連想が鬼になったらしい　五年兵だから神棚に祭り上げるより仕方がない「おい　おれと射撃くらべをしよう」おれが軽機射手であると言うと軽機を分解させ点検しながら言うから　説明した「分かってら　おまえは理屈で撃ってんのか？　じゃあ　あの橋げた五発三連！」軍曹の射撃は見事だ的確で点射もいい　さすがだなと思ったが　おれだって　あれぐらいはいけると　思ったが　指をひねって三発はずした凄いなと思ったのは　おれの肩を叩いて　おれの顔を立てて　三発はずしたな　見事なもんだ！

他隊だから　会う事はないが　連絡で本部で会ったよう元気か一杯おごる　下士官室に呼ばれた　呑み初めたら　おまえアカだってな　おれは百姓の五男坊で　ロベらしって知っているか？　餓鬼の頃から　地主の下男暮らし　現役で軍隊に入ってびっくり飯はたらふく食えるし　下士官志願して班長になって偉くなった

おれの言う事は　なんでも通る　軍隊っていい所だと思うが違うかな？　おれ　最近　おれの考えは　違うかなと　思うようになった　八路（パアロ）が　強くなったじゃあ　どうして八路が　強くなったか分からねえんだ　おまえはアカだから知ってるだろう　毛沢東って　天皇陛下と　同じかい？　おれが説明出来る訳がない　黙って軍曹の顔を下から見上げた　なっ　弾が飛んでくれば　アカもクロもねえっ　そうだろう！　アカだって弾がよけてくれるか？　おれ近頃やっと　弾が飛ぶのが見えるようになった　不思議だな　おまえの三発も見えた　鬼が酔った　なんだか分からず　酔った

今田軍曹が死んだと開いた　名射手にふさわしくない下給品のまんじゅうが　喉につかえて崖から落ちた運が悪く下に石が有った　他隊の事だから　確かめようもない　名誉の戦死　それが軍隊の慈悲ってもんだ　ほっとしたよ　あんなうるせい奴　死ねばいいと思っていた　今田軍曹が死んだ　おれになんの関係がある

今は　薄くなる霧の底で　これから攻撃する村落が　黒くうずくまっている　攻撃の合図を待つ　おれも鬼になれる　軽機の装填架に実弾を込めた

（拍手）

佐相憲一（司会）

高橋馨さんと山中真知子さん、ありがとうございました。高橋さんからは、生前の鳴海英吉さんの人物像を大変リアルに、面白くお聞きすることができました。今までの鳴海英吉研究会でも、生前の鳴海さんの人物像のさまざまな側面をいろいろな方々がリアルに話していただきましたが、今日またひとつ、高橋さんのお話で面影が加わりまし

た。山中さんの朗読はこれまた大変リアルで臨場感がありました。こういう戦場の本当の様子を書いた詩をこのような朗読の形で、いま危険な妄言を吐いているこの国の権力者の人たちに突きつけたくなりましたね。

さて、第二部の最後になりますが、岡山晴彦さんにお願いいたします。前回の研究会では、おへんろのことなどをお話いただき、「念仏ひじり」という詩を大変しみじみとした名朗読で読んでくださいました。今回もどうぞよろしくお願いします。

岡山晴彦

まず、へんろの詩抄から、戦う兵士の失った友とみほとけへの悲痛な祈り、その祈りの詩「流沙」を朗読いたします。

流沙　　**鳴海　英吉**

ゆうべ　おれは流抄の音を聞いた／さらさら　庵の屋根を叩き流れ果てた／死んで固くなった男たちが／中国の黄土の中から巻き上げられて／あふーう　あふーう　叫びながら／馳けつづけてきた　流抄の音を聞いた／おれは掌を拡げないでいる／おれが掌を拡げないのは／そのうめきまで　受け切れないからだ／さらさら　こぼれて／なにも残らない／なにも残らないはずのもので／おれの全身がくびられるようになり／つきささってくるから／おれの唇はなにかが白く乾いてくる／人を殺せようー皆んな殺してしまえ／殺したいようー／確かに　おれほおまえたちがうめくように／呪いつづけるように／もっと　にんげん　を殺すべきであった／ぼうぼうと村落を炎のなかに沈め／逃げてくるにんげんを射ちまくり／そして　連れられないまま死ぬべきであった／おれもおまえも鬼にしかなれぬ／あふーう　あふーう　と叫びながら／この巻き上る黄塵のなかをとび／ダッタン海峡を／一瞬に　馳けるべきであった／暗い海の上では　粉骨は白く見えるか／おれたちは　そうした搬ばれ方で／さらさら流れ果てなければならない／／そっと誰かに出合うために／夜ふけてから　堂のみ仏の前に坐る／列を組んでふきあふれている／流抄の　哀しいまでのとうめいな叫びは／もっと遠くに流れ果てるのか／おれはその悲しさに耐えるために坐る／おまえたちは／おれがまだ生きていることを許さない／許そうとしないで叫びつづけている／堂のなかにひとつの燭台の灯／じいじいと燃えてゆくときの一瞬に／明るくゆらめいて　修羅をみせた／所詮は　おれもおまえも鬼にしかなれない／み仏　今は黙し坐し語るな／なにもないものの形／なにもないものの宿業／を　みるために　おれは坐りつづけている／み仏よ　おれは許されたくはないが／このように合掌している／おれが許されてたまるものか／まるいまるい　顔のひとつもない／無量の白い流沙たちが群れて／あふーう　あふーう　と呼び合う／み仏の表文線の裾に流れてくるが／おれは指で　そっと拭ってみる／なにもふれるものがなかった／なにもないのだが／確かにおれは／さらさら　流れる流抄の音を聞いた／／烈しい風の吹き去って　あとは雨／白く山中の庵室を包んでふりこめている／おれは今朝も早立ちする　へんろ／ゆうべの烈しい風で白い椿が落ちた／沢山の白い椿の花の下に埋もれたへんろ道／夜明けの雨は静かに打ちつづけているから／これからは　おれは濡れながら／ひとりで歩くことになる／同行二人と書かれた笠が／もうひとりの人間のように奇妙に重いが／それでも歩くことになる／

鳴海さんの詩の中で最も魅かれていますのは「木食ひじり」です。この会では二〇〇六年に朗読して、先日も地元の詩の会で取り上げました。シベリアの詩群はおいて、へんろ・ひじり・和讃などの詩は、私の感性に非常に強く訴えるものです。二〇一〇年のこの会では「念仏ひじり」を読みました。

さかのぼれば、古代は万葉集や記紀歌謡など、それが中世に分岐して、王朝風の古今集や新古今集、対極には口承の語りの「梁塵秘抄」や説教節などが生まれて、前者が衰えると後者の俗といいますか、民衆のエネルギーが噴出して、詩歌の世界を潤してきた、とこの前申しました。この、庶民に流れる情念をすくいあげる流れの中に、鳴海さんの姿が見えます。「梁塵秘抄」は今盛んに大河ドラマでやっていますね。

その中で感じたことは、「へんろ」の「へん」はかつて「辺境」の「辺」をあてており、戦前戦後の左翼活動、中国各地で転戦、シベリアでの苛酷な抑留生活、それはまさに「へんろ」であって、鳴海さんの人生そのものがまさに「へんろ」の旅であったとも私は思います。

近代詩を含めて、日本が西洋文化を摂取して以来、伝統との決裂回避、その関わり方にはいつも非常に複雑な思いがつきまとっております。夏目漱石の「智に働けば角がたつ、情に棹させば流される」という「草枕」の名言も当時の知識人の引き裂かれた悩みでしょうか。人間の知恵を理で高みに昇華させる、対して営みの俗を情念で包んで純化させる。鴎外の端正な文体で書かれた「山椒大夫」は老残の母との邂逅が結末ですけれども、現今の説教節は、生き埋めにした山椒大夫の首を息子に竹ののこぎりでひかせるという大変むごいものです。また、後者の俗という情念に限れば、すでに江戸期の浮世絵や歌舞伎、能、俳諧、等この国独特のものを生みだしました。近代詩の中でも、語り継がれたものも含めて、現代の底辺にひそむマグマを発見し、新しい形でどう詩的に表現していくか、これは大変な力技がいると存じます。それに、文語、音数律を失った現代でさえも、うた、語りの力、が一つの核になっていくんじゃないかと思います。「インターナショナル」の歌も鳴海さんの場合は浪曲と同じように、情念の世界にあったのかもしれません。

現代において、西洋的な理の思考の上に、この国で培われてきた情念の世界をどう取り込み、融合させていくか。伝統詩の延長線上に現代詩が見えない以上、現代詩にとってこれは大きな葛藤であり、苦しみであり、大きな課題であると思っております。このような意味で、今後の詩の未来に、鳴海詩が大きな示唆を与え、また、大きな支えになると存じ、これからも語り継がれていくことを心から願っております。

（拍手）

佐相憲一（司会）

岡山晴彦さん、ありがとうございました。ミニ講演のような感じの中味の濃いお話をいただきました。

（拍手）

これで、第二部を終わります。

〈第三部　芳賀章内詩論集『詩的言語の現在』を語り合う〉

鈴木比佐雄（司会）

ご紹介します。こちらのお二人は長年、詩の同人誌「鮫」で芳賀章内さんとごいっしょされていて、さらに前の「時間」の同人でもいらっしゃいました。大河原巌さんと瓜生幸三郎さんです。

（拍手）

この芳賀章内さんの詩論集『詩的言語の現在』ができた経緯をかいつまんで申し上げますと、コールサック社は六年前の二〇〇六年にできたんですけれども、つくった目的の一つとして、詩を読む文化を育てたいということで、詩論というものを中心にしたいと思ったんです。私の第三詩論集『詩の降り注ぐ場所』の後に、石村柳三さんを誘ってですね、石村さんは仏教思想・法華経をベースにした詩論で、それと同時に並行的にですね、芳賀章内さんに、芳賀さんの詩論は大変優れているから北川冬彦などを論じたそういう詩論集をつくらせてほしいと、会社をつくる前後からすすめていたんですよ。その時、芳賀さんは「いや、自分は編集者だし、本は自分はつくる主義じゃないから、いい」と断られましてね。それでもずっと口説き続けてたんです。その間に何度か脳梗塞をされて、大丈夫かなと心配だったんですけれ

ども、昨年の初夏あたりからまた復活をされて、それが分かったんでさっそく車で駆けつけて、私に任せてくれって迫ったんです。それがきっかけで、大河原さんと相談してやってくれということで、大河原さんと相談しながらこれをつくったというわけです。私はこれにすごい価値を感じていまして、まず、戦前の雑誌をよく読んでいる。北川冬彦や春山行夫の「詩と詩論」、あと「詩・現実」をしっかりふまえて、戦前戦後をつなぐ詩論を書いているということと、編集者であった方なんですよね。雄山閣という会社の専務を三、四十年続けられました。思想、哲学、歴史、などすごい本を出されていて、ご自分は詩を書かれていて、どうしてこんな方の詩論集が存在しないのかと、何とかしてつくりたかったんですけれども、今年の三月にできました。

こちらのお二人には、今日、この本の魅力を語っていただきたいなと思っております。では、大河原さん、よろしくお願いいたします。

大河原巌

大河原巌と申します。芳賀君とは中学校の二年生の頃から付き合いがありまして、福島で育ちました。芳賀君は私が高校の時の一年後輩です。学校に文学クラブなんてのを作ろうやということで、戦後に文学クラブを作る時に、私と芳賀君が肩を組んで、作ったんです。その高校で初めてのことです。それで雑誌を出しまして、その時から、俳句や短歌や詩を書こうやということで書いていったんですけれども、「鮫」の創刊同人になってくださった人に真尾倍弘という詩人がおりまして、この真尾さんという詩人がぼくと芳賀君を励ましてくださいました。そして、ぼくを「時間」に入れて、ぼくが芳賀君を「時間」に入れました。その後、瓜生さんもいっしょになって、北川冬彦のところで研さんを積んだわけなんです。ぼくだけはその北川さんに反抗いたしまして、破門をされました。北川さんと大変なトラブルを起こしました。それがきっかけで約十八年間、ぼくは自分に詩を書くことを禁じました。その禁じることを解除したのが芳賀君です。「書けや」「俺はいやだ」「書けや」ということで、それで「鮫」が始まったんです。

そういうわけで、北川冬彦という詩人像は、ぼくと芳賀君とではまるっきり反対、鬼のような詩人と思っておりました。十八年間、そう思っておりました。今は違います。なぜ違ったか。芳賀君と付き合っているうちに、もういっぺん北川冬彦という詩人を見つめ直してみようかと、「あいつは俺を破門したけれども、いいところもあるのかな。もういっぺん読み直してみよう」と。作品に集中しました。それからです。芳賀さんとの付き合いが本物になっていきました。そして、「鮫」という雑誌が、ネオ・リアリズム。私に言わせればシュールレアリズムの本源なんだと思っております。芳賀君に言わせれば、そうじゃない、現実主義だと。だから、私と芳賀君とは本当に違っております。いつも、同人会でまじめな詩論の話になりますと、喧嘩になります。ぼくは北川さんと喧嘩したように、芳賀君とも喧嘩しました。しかし、この詩論集を見て、ああ、これはひとつにまとめるだけの価値があるなと思いました。あがってきたゲラを見せてもらいました。全部読みなおしました。なるほど、ぼくを、十八年間の詩を書かない地獄の中から救い出してくれたのが、この本に書かれているような、芳賀の詩に対する情熱、それだなと思いました。だから、私はこれからも、ネオリアリズムの詩を書いていこうと思います。

瓜生幸三郎

瓜生幸三郎と申します。大河原さんとは「時間」の同人の頃からお付き合いしています。

私の芳賀さんとのお付き合いは「鮫」を通してのお付き合いです。「鮫」は一二九号で今年の三月に廃刊ということになりました。三十二年続いたわけですけれども、その間、大河原さんと芳賀さんにはお世話になりっぱなしという感じで、ここまできました。芳賀さんは合評会などでも一番厳しい批評をしまして、それが我々の励みにもなりました。詩に対して読みこみが深いというのがありまして、複眼で一番深いところでその詩の中心を見極めるというところでした。

我々が他人の詩を批評する時には、これがいいとか悪いとか、そういうところで終わってしまうことがよくありますが、そうはいかないということです。

「時間」について申し上げますと、私は大河原さんや芳賀さんよりもずっと後に「時間」に入ったんですけれども、私が入った時にはすでに、お二人は「時間」の三羽ガラスのうちの二人でした。私にとっては大先輩ということでございます。「鮫」に入ってからもいろいろと指導していただきました。

鈴木比佐雄（司会）

芳賀章内さんは、詩人であり編集者であり、詩論家ですけれども、北川冬彦さんも詩人であると同時に、詩の運動をいろいろと起こしていって、二十世紀の詩の歴史を変えていった人物だと思います。ヨーロッパの詩の知識も豊富で、二十世紀の詩のいろいろな課題を、読んで実践して行ったと思うんですけれども、そのあたりの、北川冬彦さんと芳賀章内さんの関係を語ってくだされば思います。戦後の評論がですね、大岡信と鮎川信夫と吉本隆明などは北川冬彦を過小評価していると思います。ちゃんと受けとめていない。でも、私が読むと、彼ら三人の文章はあまり魅力的じゃないんですね。北川冬彦や戦前の詩人たちの方がかなり魅力をもっています。そんな意味で、この詩論集を読むと、芳賀さんが戦前の詩論をちゃんと踏まえて、北川冬彦さんがやろうとしたことを、「時間」の後の「鮫」でやっていったんだと思うんですけれども、そういうところを含めて語っていただければなと思います。そこへの自分たちの関わりも語っていただければなと。

大河原巌

私はさっき言いましたように、北川冬彦さんの「時間」を破門されたんですけれども、その原因は、詩人の「戦争責任」の問題でした。北川冬彦という詩人は、戦前に『戦争』という詩集を出して、戦争に対して非常にシビアな眼をもっていたはずの詩人なんです。それが、戦時中、軍部に召集されまして、南方へ連れて行かれて・・・

鈴木比佐雄（司会）

あの有名な、死んでから勲章をもらったって何でもないという、本当に軍部を批判するような『戦争』という詩集ですよね。それが「詩と詩論」で発表されて、尊敬されて、そういう人物が、やはり戦争末期に戦争に加担するようなことを書いたんですか？

大河原巌

戦後、ぼくが「時間」の同人に入れてもらったのは、北川さんの戦争に対する厳しい姿勢、それがぼくを励ましたからでした。そういう、ぼくの中の立派な詩人のはずの北川さんが、戦時中に、やはり偽名で、戦地で戦争協力詩を書いているんです。それがぼくの眼に入ってきたということです。それが一つ。それから、吉本隆明がその頃ちょうど、エッセイで前世代の戦争責任というようなことで、高村光太郎を批判して書いていました。それをぼくが取り上げて、吉本はいいことを言うなと、北川さんと話をした時に、お前はなんちゅうことを言っているんだ、と。吉本のやっていることなんか、でたらめだ、と怒鳴ったんですよ。それが、ぼくが破門されるもとだったんです。北川さんという詩人は、私に言わせれば、詩を書いている言語に対して、本当に自分の命をかけてそうしているのか、と。あの戦時中に、戦争協力詩を書いた事実は、本人はどう思っているんだ、と。これがぼくの問いかけだったんです。それに対して、雷のように怒って、ぼくを破門したのが北川冬彦です。立派な詩をのこしている詩人のイメージと、ぼくにくってかかった北川さんの詩人のイメージと、これは百八十度違っておりました。そのちょっと前に、芳賀君はそういう空気を感じていましたから、もう「時間」は嫌になっちゃって、辞めたんです。だけど、北川さんの、詩の仕事としてのこしてきているものに対して、芳賀君はぼくと同じように、評価しておりました。その評価がこれに出ています。

鈴木比佐雄（司会）

このへんが難しいところで、たとえば逸見猶吉なども暗喩を駆使して反戦の思いで侵略を批判していたのですが、最晩年に満州で戦争協力詩を朗読してしまったと、それで「けしからん」と言えるかどうか。晩年に一篇二篇書いたから全部を否定するというのは私は少し違うと思うんです。やはり、その関係の中で、逸見猶吉なんかもラジオ局でもうやめようと思ったけれどもその詩を読んでしまった。昭和のはじめのたたかっていた詩人が晩年にそうだったからといって、全部を否定するのは、まあ吉本隆明はそういうところがあったと思います。それではひどいんじゃないかと私は思います。それは非常なデリケートな問題で、でも若かった大河原さんはそこでぶつかって、破門されて、もう十八年も書かれなかったんですね。

大河原巌

やはり、詩人というのは時代の中に生きている、その苦しみの中で詩を書いていった、そういうことがその時にはぼくには理解できなかったんです。時代の中で戦争の中に追い込まれた時に、日本は勝たねばならないと、そういう中で詩人も詩を書いたんです。それがぼくには理解できなかった。どんな時代でも、戦争というものはやっちゃいけないんだと、戦争の中でも、戦争をおしすすめていくような詩は書くべきではないというのが、ぼくの若い時の考えでした。今は、時代の中で苦しみながら詩を書くのが詩人だと思っています。そして、それを越えていくのが詩人だと。その苦しみが芳賀君には分かっていたみたいです。ぼくは分からなかった。今は分かりますよ。

瓜生幸三郎

大河原さんは熱心な方だからぶつかったと思うんです。芳賀さんはよくよんでいたんですね。

鈴木比佐雄（司会）

やはり、短詩運動とかネオ・リアリズム、新現実主義とかを、詩を書きながら、理論を実践した人物ですよ。スケールの大きい人で、あの頃、「詩と詩論」とか「詩・現実」を、あんな三百何十ページのものを数カ月で編集していたというのは、出版社を専門社にさせて、すごい編集者で、その内容も小説家もいれば、思想家もいれば、翻訳者もいる、もうオールジャパンのような知性を集めてつくっていたんですね。私はあの雑誌を見る限り、よくたたかったなあと思います。そのあたりを芳賀さんはよく分かっていて、北川冬彦の戦前と戦後をつなぐ詩論を何とか正当に評価しようと思ったんだと思います。芳賀さんを読むことによって、大岡信や吉本隆明や鮎川信夫が見過ごしてきたものがこの詩論集にあるなあという認識をもったんです。

大河原巌

ぼくは芳賀君といっしょに「鮫」を始めようとした時に、そこを乗り越えたんですよ。ぼくは北川冬彦の詩は好きでね、作品はとてもいいと思ってきて、今でもそう思っています。

鈴木比佐雄（司会）

「時間」のやった新現実主義の運動というのは一つの流派ではなくて、さまざまな戦後の詩人たちの根底にあって、現実を再構築して詩の言葉で詩を書いていくということですから、すごい影響を与えた詩論ですよ。

大河原巌

その新現実主義っていうのは、北川さんは戦後に言いだしたんですよ。第二次の「時間」を始める時に、新現実主義・ネオリアリズムと言ったわけです。その前に、「詩と詩論」の何冊目かにブルトンの

「シュルレアリズム宣言」を日本で初めて翻訳したのは北川冬彦です。あの人は東大の仏文ですからね、フランス語が堪能なんですね。だから、ネオリアリズムと言った北川さんは、本当はブルトンの後継と言えるのではないかと今ぼくは考えています。

鈴木比佐雄（司会）

あと、マックス・ジャコブの詩論ですよね、そういうものが多分つながってきているんですね。二十世紀の最先端の詩論を吸収して、それを日本の中でもやろうとした。

大河原巌

第一次大戦の塹壕の中で受けとめたものがシュルレアリズムの根底にあるわけです。北川さんはそれを最初から翻訳しようとして、その前に関東大震災で東京が初めて潰滅したわけですが、その時に、ブルトンがフランスで感じたものを北川さんは日本で感じているはずです。

鈴木比佐雄（司会）

いわゆるモダニズム詩運動とプロレタリア詩運動を融合させようとしたんですね。その根底を見ようとした。スケールの大きい方だったんですね。その課題は今も残っていますよね。今もその二つのような全く違う価値があって、交流がないみたいなところがあるんですが、北川冬彦さんを見ると、本当に深く考えて実践しようとしていたんですね。試みたことはすごいなと私は思いました。

大河原巌

作品もすごいです。

瓜生幸三郎

北川さんの性格というのは馬鹿正直なところもあったのかなと思います。思ったことを抑えないでぱっと言ってしまって、それだけで相手に対して悪い印象を与えてしまう。そういうところがあったように思います。

大河原巌

そういうところもね、ブルトンに似ているんですよ（笑い）。ブルトンはシュルレアリズムの仲間をみんなクビにしたりしてね。それだけブルトンというのは自我が強いというか、北川さんみたいだったんですね。

鈴木比佐雄（司会）

そんな中で大河原さんは「鮫」を芳賀さんといっしょに続けられましたが、「鮫」の中心的な魅力に芳賀さんの詩論がありましたよね。芳賀さんの魅力的な詩論と文体ですよね。そんな意味でも、もっともっと多くの人たちにこの詩論集を読んでもらって、芳賀さんを越えるような詩論家が出てきてほしいなあと思います。

大河原巌

芳賀君は歴史の雑誌の編集者をやっていましたからね、未来につながっていくようなテーマがありますから、じっくり読んでもらいたいですね。

瓜生幸三郎

難しい表現なんですけれども、ちょっと二つばかり読みだしてみます。

〈自然環境と時代背景を抜きにして、芸術作品の特質を語ることはできないという基本的了解がある〉と「北川冬彦のリアリズム」に書いてあります。これは誰でもそう思っているでしょうけれども、往々にして忘れてしまうような基本的なところだと思います。

もうひとつ。〈この詩的言語の多義性は、装飾（形容詞）が無ければ無いほど広がりを持つ。装飾は逆に言語を装飾の枠組みの中に閉じ込

める。叙述すればするほど主題の指示能力は高まるが、詩言語の想像力を減退させる。散文性へ繋がるのだ。）これは「詩的言語の位相」にあります。

鈴木比佐雄（司会）

そういう芳賀さんは鳴海英吉さんを尊敬していました。鳴海さんが倒れた時にお電話したんですけれども、すごく心配していました。鳴海さんが芳賀さんや佐藤文夫さんや朝倉宏哉さんと私をつなげてくれたんです。芳賀さんと鳴海さんはお互いにすごく尊敬し合っていたと思います。

瓜生幸三郎

四章までありますが、やっぱり第一章がメインになっていると思いますね。この詩論のところが、一番力を入れているでしょう。それから、四章の「鮫の座」論考、これもいいんです。（本には入っていませんが）「鮫」の編集後記というのもいいものでした。社会性というか、時代の流れや危機感をその都度その都度とらえて書いていました。

大河原巌

芳賀君から伝言がありまして、目の具合が悪くてとても歩けないから、かんべんしてほしい、皆さんに謝っておいてほしい、と言われました。お伝えしておきます。来年の三月にならないと手術ができないのだそうです。三月には手術で目が開くだろうから、その後、会いたいな、と言っていました。その後にまた、この研究会にも出席できるようになるだろうと思います。

ありがとうございました。

（拍手）

佐相憲一（司会）

皆さん、今日は長時間、本当にありがとうございました。最後に、佐藤文夫さんより、閉会の言葉をいただきます。

〈閉会の言葉〉

佐藤文夫

今日はお世話になり、ありがとうございました。本来は芳賀さんが閉会の言葉を述べていただくのですが、代わりにさせていただきます。

亡くなった人のことを語ると、その人が生きかえってくるとよく言われますけれども、今日は鳴海さんも喜んでもらっていると思います。若い方も参加してくださって、本当に鳴海さんの詩を引き継ぐ、そういう方々が現れたと、大変うれしく思っています。

どうもありがとうございました。

（拍手）